
魔女はかくして勇者となる

空色景色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔女はかくして勇者となる

【Nコード】

N5347Q

【作者名】

空色景色

【あらすじ】

世界に拒絶された彼 とある一人の魔女はかくして勇者となつた。彼女のための勇者。たった一人のための勇者。彼女に文句を言い、からかい、皮肉りながらも、その存在はまさしく勇者であった。そんな爽やかでかっこいい話には到底なりそうにありません。

(一部独自解釈あります。ご注意ください。)

エピソード ただの退屈な状況説明（前書き）

“ 魔女はかくして勇者となる ”

略して “ かくなる ” 始まります。

エピローグ ただの退屈な状況説明

いつからか“ユメ”を見るようになった。

ゆめ、夢。 “ユメ”。

そんなものは誰だって見る。自分だって今まで散々見てきた。いたって普通の現象だ。

しかし、今までに見てきた夢は起きたら思い出せず、「何か夢を見ていたようだ」程度の認識しか持ち得ない、その程度の物だった。

薄ぼんやりとした、自分が主役の文字通りの夢物語。

至って普通の 正しく夢であった“ユメ”。

それがいつからだろうか。変わった…いや、夢でない“ユメ”を見るようになったのは…。

とあるなんでもない日常的一幕。ベッドに潜り、目を閉じ、明日を迎える。それだけのはずだった。

…はずだったのだ。

その日、

俺は、

夢で、

殺された。

覚えているのは美しく、ただ美しく、何よりも美しい“魔女”の姿。

金色の美しい髪を携え、お伽話に出てくるお姫様のような美しさを
持った彼女に、俺は、俺の存在そのものは、
殺された。

翌朝、目が覚めた時に俺の記憶にはその“ユメ”の内容が鮮明に残
っていた。

夢であったはずの物語。自分が死ぬという最っ高に、最っ低で、愉
快で糞ったれな夢物語。

けれど記憶に残る、はっきりとした、己が死んだという経験、そし

てその事実。夢であったはずなのに、頭が、脳が、俺は死んだと、そう突き付ける。だが現実として俺は夢から目覚め、生きている。体には傷一つなく、ましてや死んでいるなんてことはありえない。

なのになぜか確信めいたように頭に残る、殺されたという事実。夢と断ずるのは簡単なはずだが、それができない。自信の記憶がそれを現実であったと、事実であったと訴える。

殺されたという現実。生きているという現実。殺されたという事実。生きている事実。どうしようもないほどの矛盾。

意味不明なほどに、矛盾が矛盾に矛盾していた。

頭が痛い。

さつきからずっと頭の中で何かが鳴り響いているような錯覚を覚える。いつそのこと本当に死にたいと思える程に、殺されたかのように、頭が痛い。頭痛それが自分の死の証ではあるのではないかと、嫌な想像までしてしまった。頭を振り、必死に浮かんでしまった嫌な想像を振り払う。

思い出すのは“ユメ”に出てきた彼女の
美しい金の魔女の双
眸。

美しい金の髪とは異なり、どこか冷たく、それでも濁りのない、殺意に満ちた両の眼。

怖いとは思わなかった。ただ、なぜかというか、やはりというべきか、素直に美しいと思ってしまった。

そして。

今朝見た“ユメ”を不思議に思いつつも、自身が死んだという記憶に恐怖を覚えつつも、彼はいつもどおりに、昨日と同じように、また床に着いた。

彼はまた夢を見る。

明日彼はまた夢を見る。

明後日彼はまた夢を見る。

いつまでも、いつまでも彼は夢を見続ける。

殺し、殺され、
殺され続ける“ユメ”を。

「そんなわけで厨二病の俺は、厨二な力を手に入れましたとさ」

そう愚痴る彼は現在、道の真ん中で立っていた。

そんな場所で立っていれば自身が車に轢かれてしまう恐れがあるのは、誰にでも、そうまさしく当事者である彼にこそ分かっているはずだった。

事実、彼の目前には今にも彼に衝突しようとするトラックがある。運転手はなにをしているのか、止まる様子は見られない。

あと数秒もすれば彼は轢かれ、その華奢な肉体は粉碎され、死んでしまっだろう。

逃げないといけないのは分かっている。普通の人なら、数秒先の起こりうる惨劇を回避するため、脱兎のごとく逃げるのだろう。生き残る未来を信じて。だが彼は逃げるわけにはいかない。彼にはそこから動いてはならない理由があった。

別に彼の後ろに少年もしくは少女がいて、彼はそれを助けるため立ち塞がるうとしてしているなんていうベタで、テンプレな理由があるわけではない。

むしろ彼なら興味を持つことなく、見て見ぬ振りどころか、見ることもなく平然として立ち去るかもしれない。それが運命だと。

では何故彼は立ち止まっているのか。

実に簡単なことだ。

それは彼が死ぬためにそこに立っているからである。

正しくは、道を横断中に自分に向かって来るトラックを見て、彼は生を放棄することを諦めたから、立ち止まっているのだ。ただ別に彼は自殺志願者なわけではない。

ただ疲れてしまったのだ。

十 十 十

ここで彼について語らねばならない。

彼“ ”は、魔女と呼ばれる存在である。

金の魔女の“ユメ”を見たその日から、彼の日常はあっけなく崩れ去った。何の慈悲もなく、何の理由もなく、何の因果もなく、簡単に彼の日常は壊れた。

彼は毎日夢を見るようになった。夢を、ゆめを、“ユメ”を見るようになった。そして毎日“ユメ”の中で彼は殺された。

どういうわけか初めて“ユメ”を見たその日から、毎晩決まって殺しあいをする“ユメ”を見るようになったのだ。その“ユメ”にてくる殺しあいの相手は 架空の存在。

彼が好んで読むライトノベルやアニメに登場する物語の人物。 大多

数が特殊な力を用い、ヒロインを、そして世界を救う空想上の人物
あるいは英雄たちと、彼は毎晩殺しあうことになった。

空想上ではまさしく英雄である彼らとは毎日毎晩殺しあった。否
それは殺し合いではなかった。

ただの虐殺。一方的な殲滅だった。

当然であろう。彼は現実に生きる普通の少年である。対して相手は
特殊な能力を持つ空想の物語の登場人物たちである。ファンタジーのキャラクター

ましてや彼は殺し合いなどしたこともない普通の少年。加えて殺意
を向けられ、命を狙われる理由もわからない、そんな状況だった。

彼は毎晩殺された。原因は不明、理由は不明、動機は不明、全ては
不明。

しかし、毎晩殺されるという結果は変わらなかった。

ここで普通の少年だったならば、その精神は狂い、もしかしたら“
ユメ”の中だけでなく現実でも本当の死を迎えてしまっていたかも
しれない。だが彼は強かった。悪夢“ごとき”に負けない心の強さ
を持っていた。

彼は毎晩抗い続けた。夢を見ることに抗い、殺されることに抗った。
そして彼はだんだんと自身の置かれた状況を理解していった。

“ユメ”には“ユメ”なりの規則ルールが存在していた。

まず夢に現れる登場人物はある程度自由に変えられること。寝る前

に強くそのキャラクターについて思えば、そのキャラクターが現れる。もし何も考える人物がいなかった場合は、それまでに見聞きしたライトノベルやアニメの中からランダムに現れる。またどちらかが（今まで殺されてきたのがいつも彼の方だったから断言はできないが）死ぬまで夢は覚めない。まずはこれらを彼は理解した。

そして彼は決意する。殺されないことを、そして殺すことを。

“ユメ”に現れる人物を指定することができるのなら後は簡単だ。自分でも勝てるキャラクターを選択すればいい。後は策を巡らせ、正々堂々不意を打てばいい。真正面からなんてバカのことだ。

そうして初めて彼は殺されることなく、久しぶりに懐かしい“いつもの”朝を迎えた。

くしくもそれは、“ユメ”の中とはいえ、初めて人を殺したことを意味するわけであった。だが彼は“ユメ”の中とはいえ人を殺したことに對し、普通の人のように後悔や懺悔で苦しむことはなかった。

彼は聖人君子でも、ましてや善人でもない。常に善を為さなければならぬ善人になどなれるわけがない。彼は16というまだ子供と言える年齢であっても、世界がそれほど優しくはなく、ましてや人はそこまで美しい存在なんかでは決してないと認識していた。ゆえに彼はどこか斜に構えた、皮肉屋っぽく育ってしまったのだが。

そんな彼だったが、彼は一つの信念を持っていた。自分を信じる、ただそれだけである。世界は優しくなく、社会は嘘に満ちていて、人は綺麗でなんかいられない。ゆえに彼は自分を信じて、自分の思うままに生きる。その結果何が起ころうと、どんなに後悔しようとも、全てを受け入れ乗り越えて強くなろうと彼は決めていた。

だからこそ彼は殺し合いという行為の結果、人を殺したという事実も受け入れ、そして乗り越えた。それは歪な強さで、彼の生き方を歪んでいると言つる者もいるかもしれない。しかしそんな批判も何もかもを乗り越えられるからこそ、
彼は何よりも強かった。

それから彼が殺されることは極端に減っていった。勝てる相手を選定すればいい、それだけだった。物語の登場人物だけ、いくら弱い相手を指定しても不安は残ったが、彼には策を巡らせる頭脳も時間もあつた。

幾ばくかの時を経たある日、“ユメ”の中で彼は気づいた。今まで殺した相手の能力を使えることに。

彼は勝てる相手を指定してはいたが、完全な一般人である普通のキヤラクターは選択していなかった。夢とはいえ良心の呵責があつたのだ。それゆえ彼が殺してきた相手は、様々な悪役であつた。しかし悪役であればどのような物語であつても、完全な一般人はなかない。いたとしてもモブキャラであり、殺しあいの相手に指定することはできなかつた。どうやら姿と名前をはつきり認識できるというのが相手を指定できる最低限の要素であるようだ。

そして彼はいつものように殺しあいをしている最中、ふと気付いた。殺した相手の能力を篡奪していることに。

彼が今まで殺して来た相手には大なり小なり、何かしらの能力を持つ者たちがいた。彼らが使っていたそれらの能力を彼が使えるようになったのだ。

ただの夢ならよかつた。しかし夢ではなかつた。夢にはなりえな

った。

これは現実であり、幻想であり、物語であり、童話であり、寓話であり、喜劇であり、悲劇であり、空想であり、妄想であり、偽物であり、何よりも夢であり、

ただしそれは“ユメ”であった。

ゆめ、夢。 “ユメ”。

彼が篡奪した能力はすべて現実で使えたのだ。まるで物語の主人公のように、彼は篡奪したすべての能力を現実で使うことができた。

彼は能力を使えることに喜んだ。そこに能力に対する恐怖はなく、純粹な歡喜があった。

彼は憧れていたのだ。初めてライトノベルを読んだあの日から、物語の主人公のように特別になりたいと。今ここにそれが叶ったのだ。

初めてライトノベルというものに触れ、その主人公である彼女に憧れた。彼女の強く、優しいその姿に彼は憧れた。彼は彼女のようになりたかった。そんな思いがあったからこそ、あの始まりの“ユメ”に彼女がでてきたのだろう。

彼の始まりである彼女。そこから始まった彼だけの物語。

だからこそ、彼は彼女にあやかり、自身をそう呼ぶことにした

魔女、と。

それから彼は自分になりたい自分を、彼女を目指し、殺しあいを通

けた。勇者を殺し、魔王を殺し、英雄を殺し、数多の主人公たちを殺してきた。

しかし彼は得た能力を現実でむやみやたらに使うほど愚かではなかった。

彼は物語の主人公になりたかったわけではない。

ただ憧れていただけだ。

偶然得た能力に溺れることはなかった。現実でそれらの能力を使っているのを万一にでも見られたら大問題になる。

人は異端を拒絶する生き物だ。もし彼のことがバレれば、現実には彼の居場所は無くなってしまふであろうと、彼はきちんと認識していた。

それゆえ、彼は現実で能力を使うことは、ほとんど無かった。彼には憧れていた物語の主人公のような能力を手に入れたという事実だけで十分であったのだ。それだけで殺されてきた彼は報われる。

だが、彼の認識は甘かったという他ない。世界は優しくなんてなかったのだ。分かっていたはずなのに、世界は優しくなんてないと知っていたはずなのに。

現実には魔法も超能力も存在しない。なぜなら現実であり、そういう世界であることが、人々にとって当たり前であるからだ。

けれど、彼は魔法も超能力も手に入れた。それだけに留まらず、さらに様々な不思議な能力を手に入れた。

それ故に、彼は世界にとって異物だった。

魔法や超能力なんてものは存在しない現実の世界。この現実でいえば、彼は異物でしかなかった。

当然、異物は排除される。自然の摂理の如く、まるで世界のルールのように。

彼の好きなサブカルチャー風に言えば、世界の修正力なんて言えるだろう。

つまり、彼は世界に命を狙われるようになったのだ。

ある時は事故で、またある時は人災で。ありとあらゆる手段で世界から命を狙われた。

だが忘れてはいけないのは異物たる証である魔法や超能力なんていう力を、彼は現実には現実として使えることである。かくして彼は世界から命を狙われ続けるも、それを撃退しつづけた。

それはあまりにも理不尽だった。見たくもない“ユメ”を見せられ、何度も殺され、世界には命を狙われる。

彼は異端の始まりは彼が望んだものでは、決してなかった。彼はあの日もいつもと変わらない日常が続くと信じていたのだ。しかしその思いも理不尽に、完膚なきまでに壊されてしまった。そしていつしかその理不尽を受け入れ、殺しあうことを日常としてしまったのだ。

言い換えれば、彼はあの時理不尽に屈したといえる。

故に彼は世界に殺されてなんかやらない。二度も理不尽に屈してなんかやらない。二度も負けるだなんて、彼のプライドが許さない。篡奪した全能力を使い、世界に殺されることを拒絶する。

そうは言っても毎日毎日現実でも、“ユメ”でも命を狙われるという状況に、彼は疲れてしまった。

いや、正確には違う。飽きてしまったのだ。

世界に命を狙われ続け、その状況で生き残るゲーム。彼は今の状況を、そんな風に考えていた。

よく変人などと呼ばれる彼は、自身が特殊な能力を持ち、かつ自身が特殊な状況に置かれている現在をゲームに見立て、勝利条件を探していた。

そして道の真ん中に立ち、トラックに轢かれる間際という現状に繋がる。

彼は今ここで殺される 世界に。

だが死んでなんてやるものか。彼はそんな矛盾を決意する。

「勝利条件は世界を倒すこと。世界を壊すことなんて不可能。敗北は俺の死」

彼は現状の確認するかのように、小さな声で呟いた。

「勝ち目なんてない。なら勝ちなんていらぬ。世界を倒す理由は理不尽に屈しないため。なら勝利条件はこうとも言える」

負けないこと。

「理不尽に負けなければいい。世界に負けなければいい。殺されなければいい」

彼は向かい立つ。死に対して、死を求めて、死を迎え討つ。

「世界の望み通りっていうのは尺だが、殺されてやるつ」

そして、

「死を乗り越える」

それは、誓い。

彼が得た、彼が憧れた数多の主人公たちより篡奪した、最強の能力に誓って死んでならない。死すらも乗り越える。

「世界よ、お前が殺せない存在になれば、俺の負けはない。俺は理不尽に屈しない」

彼の華奢な体躯がトラックに跳ね飛ばされるまで、あと1・0秒。

「最後に呪いをかけてやる」

0・8。

「糞みたいな残酷な世界よ」

0・6。

「俺はてめえが大嫌いだ」

0・4。

「こんな糞つたれな世界の中で」

0・2。

「世界に幸福を」

0・0。

十
十
十

そうして魔女である彼の物語は終わりを告げた。

彼はどこまでも皮肉屋で、それでいて確かに強かった。

これで魔女の物語のエピローグは終了となる。

そしてこれから始まるのは一人の勇者の物語。

そうこの日、一人の勇者が誕生した。

心優しき、皮肉屋の、物語の主人公に憧れた一人の少年が勇者となる、壮大なプロローグ。

その記録は ここから始まる。

エピソード ただの退屈な状況説明（後書き）

かくなる

……ないな。

第01話 そしてプロローグは始まる(前書き)

さあ、諸君！今日は年に365回の可愛いヒロイン記念日だ！

第01話 そしてプロローグは始まる

フローレンス王国第二王女フィーネ・フォン・フローレンスは王都から離れた貿易都市であるフェニキスの城内の壮大な儀式場にいた。床には大きな円といくつもの複雑な幾何学模様が描かれており、高いドーム型の天井にも同様の文様が刻まれている。

見る者に威圧感を与え、異様な雰囲気醸し出すその部屋の中央で、フィーネは緊張していた。

「姫様、緊張せずともあなたなら大丈夫です」

フィーネの後方、部屋の隅から一人の老人がフィーネに声をかけた。白い髪と同じく白い髭、深く刻まれた皺、優しい表情ながらも威厳を感じさせる風体。そして何よりもその手に持つ魔法使いが使うかのような大きな杖が、彼の存在を際立たせていた。

「そうは言っても緊張しますよ。なんととってもこの国を守るために最低でも精霊は召喚したいんですからミラン師匠」

そう、フィーネはこのフローレンス王国のために召喚の儀をしようとしている。

今ここアーク大陸では、フローレンス王国とアースガルド帝国の間で、戦争が起きようとしていた。

アーク大陸には4つの大国が存在する。

軍事の国 アースガルド。
技術の国 レイナーク。
魔法の国 アルトネイオス。

そしてこの国。

平和の国 フローレンス。

あとには大陸各地にぽつぽつと小国やどの国にも属さない多くの村が存在していた。

アースガルドは軍事の国と呼ばれるように、大陸一の強国であり、最大の軍事国家であった。

しかし軍事の国であるがゆえに平和とはなかなか呼べず、近隣諸国や土地を吸収しようとするあまり争いが絶えず、つい最近まで国内は荒れていた。

そう荒れていた、それはもはや過去の話である。ここ数年でアースガルドは国内の反乱を治め、突如軍備を増強し始めた。

当初は4大国も、どの周辺諸国も帝国内の基礎固めと捉えていたが、その予想は早期に裏切られた。

アースガルドからフローレンスに向けて軍が送られてくるようになった。それはいわゆる小競り合いというようなものだったが、近い将来の戦争を想起させるには十分だった。

フローレンス王国国王ゼブロンはこれに対し、早急に対策を進めた。

フローレンスは平和の国が示すように、人間、亜人問わず交流を持つ国民の平和を願う国だ。その性質故軍備を拡張するようなことをせず、今まで平和を謳ってきた。

これは今まで4大国間が争うようなことがなかったためだ。4大国同士で争えばたとえ勝利したとしても被害は大きく、戦争というデメリット以上のメリットを持ち得ない。それゆえアーク大陸では今まで大きな争いがなく、今日まで平穏であった。

しかし事態が急変し、アースガルドはフローレンスに戦争を仕掛けようとしている。

国力だけでいえばフローレンスはアースガルドに遠く及ばない。もし戦争が起きれば、フローレンスの敗北は誰の目にも明らかだった。

だからこそフィーネは召喚の儀を行おうとしていた。

フィーネは優しい子だった。

フィーネは身分にこだわらず、誰にでも丁寧な言葉遣いで話し、騎士や給仕の者たちとも分け隔てなく話しかけ、仲良くなる。

そんな彼女は戦争という未来に悲しみ、皆を守りたいと思い、召喚の儀を決意した。

召還という魔法は大規模儀式魔法であると同時に、最大の難易度を誇る魔法である。

莫大な魔力に膨大な召喚術式が必要となる上に、最後に求められる

のは運である。

今フィーネが召喚しようとしている精霊で考えれば、精霊は人間よりも上位の存在である。そのような存在が人間の召喚に応じるなど普通はありえない。

むしろ何か召喚されればいい方なのである。

大抵は複雑な工程を踏み、莫大な魔力を持ってかれても召喚は成功しないことがほとんどである。

召喚儀式はいわば隷属の儀式でもある。術者の願いを持って、願いをかなえるために召喚はされる。

例えどんな存在であれ見ず知らずの者の願いのために、隷属するだなんてことはありえないのだ。

それを理解した上で、フィーネを召喚に挑む。

王族故に通常よりもはるかに多い魔力を持ち、膨大な術式と工程を完了するために手伝ってくれる今は隠居してしまっているが、フローレンス王国一の大魔法使いであるミラン師匠もいる。

召喚の儀に必要な準備はすべてそろっている。

戦うこともできないフィーネができることは、せめて皆を守ってくれる存在が来てくれることを祈り召喚することである。

ミランもフィーネのその優しい思いを知っているからこそ、惜しむことなく自身の知識と時間を最大限に活用し、成功のため召喚の儀

の準備に励んだ。

ミランとともにフィーネの後方に万が一のために控える騎士たちも、フィーネのその想いを知っているからこそ、優しい彼女の成功を祈る。

「姫様の努力は知っております。成功しないはずがありません。もし失敗などしたら、師匠から出来の悪い弟子に毎日大量の宿題を出してやりますぞ」

ミランは少しおどけたようにフィーネに言った。

師匠の緊張を少しでも和らげようとする優しさ感謝し、心配性な師匠に対して小さく笑う。

そして儀式は始まる。

「いきますー！」

魔法とは自身の内包する魔力を呪文や杖を媒介にして発動する、あらゆる種の奇跡である。

大切なのはイメージすること。

強く強くイメージし、魔力が呪文や杖、魔法陣を媒介にして流れ、イメージに具現化する力を与え、魔法として顕現する。

フィーネは強くイメージする。

この国を、皆を守ってくれる

勇者を。

精霊なんか足元にも及ばないような、おとぎ話のような勇者の姿を。

「
告げる」

フィーネはその美しい金の髪の毛を漂わしながら言葉を紡いでいった。

言葉とともに輝きだす彼女の足下には、床に描かれた幾何学的な模様が宙空に浮かびあがっていた。彼女の髪の毛の色と同じ美しい金色の光が煌めきながら流々と、幾何学的な模様　魔法陣は魔力に満ち溢れてゆく。

「
、
」

それは流れるような美しい声。歌と聞き間違えてしまいそうなほど、幻想的に美しい召喚の呪文。

フィーネは歌うように呪文を紡いでいく。

「。」「

全ては国を、皆を守るために。彼女は祈りを込めて呪文を進める。とつとつと謳つように呪文は紡がれていく。

「つ」「

彼女の願いに応えるが如く魔法陣はより一層輝きを増す。魔力がまるで波のようにつねり魔法陣を走っていく。

「よー！」「

魔法陣は魔力で満たされた。部屋は輝きで満たされ、とてつもない量の魔力が満ち溢れる。

そしてフィーネは、

「来て！お願い！」

ただただ願う。

バチバチッ！ジジジジジジジ！！！

門は開かれた。

門は閉じられた。

フィーネの願いは正しく通じた。

門は満ち、その役目を果たした。ならば彼女の願いは応えられる。

儀式場を満たす魔力の奔流は静まりかえり、足元の魔法陣が余韻のように淡く光り、フィーネの姿を照らしている。

門は開かれた。

門は閉じられた。

フィーネの目の前に光の粒が集まりゆく。それはだんだんと人の形を為し、次第に光は消えていく。

儀式場には静寂が満ち、段々と光を失ったその空間は闇に包まれていくはずだった。

目の前の人の形が成った瞬間、パチンツ！という音が聞こえ、あたりは再び光に包まれた。

「召喚って…どこのFateだよ…。いや果たしてそれゆえの運命なのか」

どこか呆れたような声が聞こえたかと思えば、“彼”はそこにいた。

黒い髪に黒い瞳。

整った容姿にフィーネと同じく15、6歳くらいかという若さの少年。

高い背丈に華奢な体躯。

見たこともない衣服。

おかしいことに彼からは魔力がまったく感じられない。

にも関わらず、彼から感じる圧倒的なオーラ。

「これこそがFateならば、言うことはひとつしかないな」

彼はそう苦笑した。

目の前のどこか幻想的な光景から目が離せず、体が動かない。

この突然の事態に警戒し、フィーネの後ろに控える騎士たちが、彼に刃を向けようとしたことが分かった。だがそれは叶わぬことだった。

それは絶対的強者の風格。

何人も到達することのできない頂に達したであろう、力の脈動。

彼の前に立っているだけで、金縛りにあったかのように体は動かず、喉がからからと渴く。

動けるはずもない。動けるわけがない。この空間において、支配者は彼だった。

彼の右手には、いつの間にか一本の剣が握られていた。

途方もない魔力を纏い、見る者すべてを見惚れさせる神々しさを持った黄金の聖剣。

圧倒的な威圧感が場を襲う。

そして彼は手に持った聖剣を彼女に向ける。

誰もその動作に対して動けない。

彼のたったひとつの動作に皆が注目し、目を見張る。

そして彼は問うた。

「問おう。君が俺のマスターか」

彼は魔女であつた。

彼は魔女と名乗っていた。

しかし　　今この時を持って彼は勇者となつた。

たった一人のための勇者。

彼女のためだけの偉大な勇者。

元魔女の皮肉屋な彼は、

フローレンス王国第二王女フィーネ・フォン・フローレンスの

勇者

となつた。

第01話 そしてプロローグは始まる（後書き）

なんだかんだで髪が鮮やかなブロンドのお嬢様って、ビジュアルに
関して言えば最強だと思うの。

第02話 運命な召還と戯言な誓い（前書き）

話がなかなか進まないだ！？

いいぜ、まずは思ったより小説って難しくって書くのしんどい...なんていうそのふざけた幻想をぶ（ry

第02話 運命な召還と戯言な誓い

召喚。

彼が世界に殺され、やっべ死亡フラグ立てすぎたか、と焦っていた時だった。

声が聞こえた。

歌うような、流々と流れる美しい声。

……………！

実際彼はあの時、まさしくトラックに轢き殺され、確かに死亡した。

だが生きている。生きているのだ。

彼は今ここにこうして生存している。

体は存在せず、思考だけが生きている。

肉体は死亡。思考は生存

またもや矛盾している。

彼の存在は矛盾に満ち溢れていた。

（おいおいおい…。矛盾し過ぎてて意っ味わかんねーぞオイっ！）

もしや厨二病をこじらせすぎたか、と悩む彼を余所に、声は続く。

……………。

何と言ってるかは分からない。

でも何故だかその声は彼に響いた。

声が聞こえるということとはどこかと繋がっているということ。

思考できるということは、まだ自分が存在していることの証明。

ならばまだ彼は世界に負けておらず、理不尽に屈していないということになる。

……………ッ！……………ッ！

段々と声が近づいて来るように感じる。

果たして声が近づいているのか、彼が近づいていつているのか。

後者だと、彼は判断した。ただ感じるのだ。呼ばれていると。

このままこうしていても何も変わらない。ただここで永遠に思考のみが生きつづけるのかもしれない。

それは世界への敗北なのだろうか。

……い！……て……！

呼ばれている。

彼は確信した。この先に自分の生があると。それは今までに散々してきた殺しあいでも培われてきた直感ゆえのものかもしれない。

生を得ることができれば、世界は彼を殺せず、彼は死を乗り越えたことになる。

ならばこそ、理不尽に屈するを良しとしない、負けず嫌いな彼が取る行動は決まっていた。

……求める！……よ！

彼を呼ぶ声が聞こえる。

ここまで来れば彼には分かった。

召喚。

その声は彼を召喚しようとしていた。

ハッ！世界に拒絶された俺を召喚しようだなんて俺以上の変態かよ！

だが、面白い。

世界に屈するのは、真っ平ごめんだ。

だったら喚ばれてやろうじゃないか、この声に！！

来て！お願い！

召喚主がモブだなんてのはよしてくれよ。そんな退屈なのは嫌だからな。せいぜい退屈させるな！

いや退屈なんてさせてやるものか！

新たな生よ、新たな世界よ。俺についてこい！

魔女の物語の主人公が、お前をとことん引つかき回しに行つてやる。感謝しろ。

世界は平凡か？未来は退屈か？現実 is 適当か？

安心しろ。それでも、生きることは劇的だ！

だから。

十 十 十

「問おう。君が俺のマスターか」

戲言的に某赤の請負人風に格好つけて召喚された彼の前には、少女がいた。

ネタで始まったのならばネタに続けとばかりに、F a t e なセリフを吐く。

その内心はゼロでくぎゆうな世界だったらミスったなど、ふざけたことを考えているが。それも厨二病だから仕方ない。厨二病がすべて悪いのだ。

右手にちゃっかり約束された勝利の剣が握られているのも、厨二病のせいである。

版權？何それおいしいの？

まあ、“こちら”で自分の能力が使えるかという確認の意味もあったのだが。

まるでどこかのお姫様が着るかのような純白のドレスにも似た、けれど決して華美過ぎない衣服をまとったその姿は、気品にあふれていた。

腰ほどまである長い金色の髪、今はどこか啞然としているような表情をしているが、優しげな顔立ち、彼と同じく15、6歳であろうかという少女。

彼女の美しい金髪はなぜか不思議と“彼女”を連想させた。

「…あなたは勇者さまなのでしょうか？」

少女は彼の問いに、問いで返した。

……………勇者ね。

「喜べ少女。君の願いはようやく叶う」

正義の味方じゃなく、勇者であるのが少し惜しい。

「君が勇者を求めるといふのなら、俺は君の勇者になろう」

世界に拒絶された身を喚び、敗北という未来から救ってくれた礼だ。それくらいはしてやらないと罰があたる。召喚されるだなんてどこぞの主人公みたいな状況というのも、彼の気分を高揚させている一因となっている。

「だからこそ問う。なぜ勇者を求める？」

その問いを聞き、どこか呆けていたような表情をしていた彼女は、目を見張った。

先程までの様子とは一変し、その姿は凜々しく、正にお姫さまと呼ぶに相応しかった。

「守りたいからです」

今度は問いで返さなかった。

「何を？」

「この国を。この国の皆を。この国の未来を私は守りたいです」

彼女は答える。

「私には何の力もありません。王族としての魔力はありますが、戦うことができません。戦う力がありません」

自分には力がないと、悲しい現実を認める彼女の瞳にはその悔しさからか、泣きそうだった。

「でも私は守りたいのです。この国も、この国で暮らす皆も」
彼女は願う。

「どうかお願いします。皆を守ってください、勇者さま」

そして彼女は　　涙した。

彼女の頬に一筋の雫が流れる。そこにどんな感情があるのかは分からない。涙の理由なんて会ったばかりである彼には分かるはずもないのだから、仕方ないのだろう。

けれど、ひとつだけ彼にも分かったことがある。

彼女はきっと　　優しいのだろう。

誰よりも、何よりも、きつとずっと優しいのだろう。

守りたいという彼女の真摯な願いから、彼女の優しさが伝わってくるかのような錯覚に陥る。

そんな少女のやはり、“彼女”にどこか似ていた。

金の髪以外に共通点などあるように見えない。身に纏う雰囲気も“彼女”のそれとは異なっている。

ああ、そうか。

彼女の在り方が似ているのだ。その強さが。

方向性の違う強さ。けれど彼女の優しさには、確かに強さがあつた。守りたいという彼女の願い。その想いは美しく、何よりも美しかった。

守る力がないのならば、見捨ててしまえばいい。

守る力がないのならば、諦めてしまえばいい。

守る力がないのならば、逃げてしまえばいい。

それが普通の人間だ。守りたいと願っても、彼女が背負う必要もないのだ。彼女にも立場があるのかもしれないが、それでも彼女だけが背負う必要なんてどこにもない。他の人に任せて、逃げてしまうという選択肢もあつたはずなのだ。

でも彼女は決して逃げなかった。

心の底から守りたいと願い、彼女にできることを模索した結果が、今回の召喚だつたのだろう。

だから彼女の心は強いのだろう。

つたく。モブどころじゃない。どこの主人公だよ。

彼は彼女に必要とされている。守りたいものを守るために。

世界に拒絶された彼を必要としてくれている。その事実が何よりも嬉しかった。

しかも彼を必要としてくれているのは、彼が憧れた“彼女”にも似た少女。

やれやれ。こんなのに…なるしかないじゃないか。主人公に　　彼
女のための勇者に。

「カナメ」

「えっ!？」

「俺の名だ」

「あ、はい！申し遅れました。フローレンス王国第二王女、フィーネ・フォン・フローレンスといいます」

名前は、彼の憧れた魔法の“彼女”から借りた。

以前の名は捨てる。彼はここからまた始めるのだ。

魔法であった彼の物語は終わった。そしてここからまた彼の物語は始まる。彼を主人公として。

彼の勇者としての物語が。彼女のための勇者の物語が。彼と彼女の
カナメとフィーネの物語が、今始まる。

彼は誓う。

主人公となることを。

そして。

「俺は君の、フィーネのための勇者となることを誓おう」

カナメはフィーネの前で片膝をつき、フィーネを見上げる姿勢を取る。続いてカナメはフィーネの手を取り、そつと口づけをした。

その様は騎士の誓いにも見えた。最も今回は勇者の誓いという一風変わったものである。それもカナメとフィーネのためだけの特別な、彼らだけの儀式と捉えれば、正にカナメは主人公であり、フィーネはヒロインだ。

才人とは随分扱いが違うな、これでこそ主人公だと相変わらぬことを考えて苦笑しつつ、カナメは告げる。

戯言で始まり、戯言で終わる。

言葉を今の状況に即して変えて、戯言を。

「貴女が乾きしときには我が血を与え、貴女が飢えしときには我が

肉を与え、貴女の罪は我が贖い、貴女の咎は我が償い、貴女の業は我が背負い、貴女の疫は我が請け負い、我が誉れの全てを貴女に献上し、我が栄えの全てを貴女に奉納し、防壁として貴女と共に歩き、貴女の喜びを共に喜び、貴女の悲しみを共に悲しみ、斥候として貴女と共に生き、貴女の疲弊した折には全身でもってこれを支え、この手は貴女の手となり得物を取り、この脚は貴女の脚となり地を駆け、この目は 貴女の目となり敵を捉え、この全力をもって貴女的情欲を満たし、この全霊をもって貴女に奉仕し、貴女のために名を捨て、貴女のために誇りを捨て、貴女のために理念を捨て、貴女を愛し、貴女を敬い、貴女以外の何も感じず、貴女以外の何にも捕らわれず、貴女以外の何も望まず、貴女以外の何も欲さず、貴女の許しなくしては眠ることもなく貴女の許しなくしては呼吸することもなく、ただ一言、貴女からの言葉のみ理由を求める、そんな至高の存在にして最強の、貴女の願いを叶えるための貴女のためだけのたった一人の勇者になることを　ここに誓おう」

結局は戯言だけ。

第02話 運命な召還と戯言な誓い（後書き）

ちなみに主人公の憧れた“彼女” 魔女のカナメを主人公とするライトノベルは、私が人生で初めて読んだライトノベルです。

せつかなので作中に登場させていただきました。奇しくも作者と同じく、今作のカナメのOTAKU LIFEを作り上げた根幹げんいんとして。

タイトル分かる人は果たしているのでしょうか？

私は大好きなのですが、当時回りでライトノベルを読んでる友人たちも知らなかったのは悲しくも、懐かしい思い出です。

ちなみにもう何年も続きが出るのを待ち続けているのですが、信じていいのでしょうか？

続きマダー？

第03話 第二王女の勇者さま（前書き）

主人公は変人じゃなくちゃ駄目だ、みたいな強迫観念がなんかあります。

私だけでしょうか？

第03話 第二王女の勇者さま

フィーネはカナメを城内にある応接室に案内し、改めてカナメと向き合った。豪華な椅子に腰をかけているのはカナメとフィーネ、ミランの3人である。他のものは壁際に立って控えていた。

応接室には先ほど儀式場にいたメンバーがそのまま揃っている。だが騎士たち、特にフィーネの近衛騎士

隊長である銀髪の女性　　アリシア・ソレイシイは、カナメに対して警戒と敵意をむき出しにしていた。

「改めまして自己紹介をさせていただきます。フローレンス王国第二王女、フィーネ・フォン・フローレンスです」

「姫様の魔法指南役を仰せつかっているミランと申す」

「カナメだ。性はそうだな…ハインツと名乗っておこう」

ハインツという性も、カナメ繋がりだ。元は性ではなく名だが、まあいいだろう。

警戒されてる中、あからさまに偽名だというカナメに向けられる視線が、より一層厳しくなったのは仕方ないだろう。

もともとカナメ本人はその状況さえ楽しんでるが。

「…カナメ様は本当に勇者様なのでしょうか」

「フィーネ、君がそう思うのならそうなのだろう」

フィーネの質問に、カナメは言葉遊びのように答える。

この男、まともに答える気はない。巷で変態と話題の彼は、内心ではにやにやと、表情にはそんなことはおくびにも出さず、そのドS心を発揮する。

当然カナメのその態度は、アリシアの癢に障った。

「貴様っ！ 姫様に対してその態度は何だ、不敬だぞ！ しかも勇者だと！？ ふざけるのもいいかげんしろ！ 魔力もないような貴様のような男が」

その先の言葉は続かなかった。

「少し黙っていてももらえるかな？」

疑問形であるその言葉は、命令であった。

今にも剣を抜こうとしていたアリシアの喉には一本の刃が添えられていた。

カナメがいつの間にか彼女の背後に回り込み、投影にて作り出した剣で彼女の動きを封じたのだ。

一瞬の出来事、誰もそれに反応できなかった。刃を向けられたアリシア本人でさえも。

瞬歩。極められたその歩法技法は、眼にも映らぬ程の高速移動瞬歩を可能とする。

カナメの放つ殺気に室内の誰も動けない。しかしその殺気もすぐに霧散し、もとの空気に戻る。

いつの間にかカナメの手に握られた刃は消え、彼は席に戻っていた。

「失礼。少々威嚇させていただいた」

そうやってカナメは微笑んだ。とてもさっきのとんでもない芸当をやったのけた人物には思えない。

(この少年、やはり只者ではないな)

応接室で対峙していたミランは、先ほどのカナメの行動を見て心の中で唸った。

ミランには何も分からなかったのだ。フローレンスで1、2を争う大魔法使いであるミランでさえも、カナメが何をしたのか、一切が分からなかった。いつの間にかアリスアの背後を取っていたその動きが体術であるか、魔法であるかのさえ。加えて虚空から剣を取り出すその魔法もミランの知識の外にあるものだった。

またミランは応接間に入ってから、カナメから魔力を感じないことに疑問を覚え、探知の魔術をカナメに使っていたのだ。

結果、なにもわからなかった。

魔力がない理由が、ではない。カナメのことが何一つ分からなかったのだ。

ミランほどの大魔法使いが使う探知の魔法を持ってしても何も分からないということは、ひとつの事柄を意味する。

カナメは意図的に何らかの方法で自分の力を隠している。

そしてそれは、カナメの實力はミランなど足元にも及ばないほどのものであるということだ。

カナメの實力がミランの考えた通りのものであるならば、カナメはミランの放った探知の魔法など気付いている。

本来探知の魔法を使い、勝手に相手のことを調べることは無礼に当たる。

しかしカナメはミランの行動を咎めることなく、そして歯牙にもかけていない。

大物だ、とミランは思った。勇者というのも嘘ではないのかもしれない、とも。

「もう、アリシアもやめてください。勇者様、無礼をお許しください」

フィーネがアリシアの行動を詫びた。

「いや、気にしなくていい。警戒するのは当然だ。あと勇者様だなんて言わないでくれ。カナメでいい」

「えっ、ですが」

「俺は君に忠誠を誓った。様付けなんてムズがゆいだけだ」

「そうですか…、わかりました。それでその…さっきのもそうです
が、忠誠とはどのような意味なのでしょうか？ゆ…カナメ」

カナメはフィーネが名前を呼んでくれたことに満足げに頷き、答える。

「そのままの意味だ。誓い通り、俺は君に忠誠を誓った。俺は君の、
フィーネのためだけの勇者となる。そこで聞きたい。フィーネの
守りたいという想いは、どういうことなんだ？」

「それは…」

そしてフィーネは語る。フローレンス王国の危機を。彼女の大切な
ものたちに危機が迫っていると。

フィーネは、彼女の大切なものを守りたく、力のない自分が悔
しく、皆を助けようと召喚に挑んだことを。

「そうか…」

「はい。いつアースガルドが攻めてくるかと思うと、いてもたっても
もられず…」

「心配するな、フィーネ」

「えっ？」

「俺が君の守りたいもの、すべて守ってやる」

「ですが…」

「言つたる。俺は君の勇者だつて」

そう、すでに彼は誓つたのだ。フィーネの勇者になると。

「力がないなんて悔しく思う必要はない」

「…無理に慰めてくれなくて大丈夫ですよ。私は弱いんです。それが悔しくて仕方ないんです」

「いいや、君は強い。君は逃げなかつた。力がないからといって諦めなかつた」

力がないことを理由に諦めなかつた。

そんな彼女を弱いだなんて誰が言えようか。

「もしフィーネを弱いという奴がいるならば、俺は決してそいつを許さない」

「……………」

フィーネは黙つてカナメの言葉を聞いていた。

「だから自分のことを弱いだなんていうフィーネを、俺は許さない」
守りたいと願うその優しい心。

「君は強い」

決して諦めないその想い。

「そんな君の在り方を美しいと思った。だからこそ俺は君の勇者となることを誓った」

だから自分のことを弱いだなんていう彼女を、カナメは許せなかった。

「君は強く、美しい。もう二度と弱いだなんて、言わないでくれ」

守りたいと願った君の姿に憧れた俺を、失望させないでくれ。

「俺を信じるフィーネ。強い君を信じる俺を信じる」

最後にもう一度。

「君は強い」

「うつ…はい……。ありがと…う…ひつく……」ごじます」

いつの間にか室内は静まりかえっていた。そんな中で俯いてしまったフィーネの嗚咽だけが響く。

フィーネにとって、強いだなんて言ってくれた人は今までいなかった。

誰とでもわけ隔てなく接し、給仕のことを友達だなんていうような優しい彼女であったが、強いと言われたのは初めての経験だった。彼女に近づいてくる人は、彼女の優しさを利用して王族に取り入ろうとする汚い大人たちばかりだった。

給仕の友達たちも、あくまでフィーネがお姫様であるという一線だけは持っていた。

だから…。

フィーネのことを対等に見てくれて、ましてや強いと言ってくれる人は初めてだった。

それが嬉しくて…。

何よりも嬉しくて…。

卑怯だ、と彼女は思った。

そんなことを言われたら我慢だなんて出来るはずがない。

「……………う……………う……………ぐすつ……………」

しばらく涙は止まりそうもない。これじゃあ、お礼を言うことすらできそうにない。

だからせめて。

心の中でめいいっぱい感謝を。

ありがとうございます、と。

十
十
十

たっぷり10分は経って、ようやくフィーネは顔を上げることができた。

目は真っ赤で、泣いた跡は消えそうもなかったが、その表情はどこかすっきりしているようにも見えた。

フィーネは自分を対等に見てくれたカナメに対して、顔が赤くなるのを感じていた。

「えと、ありがとうございます」

「なに、気にするな」

そう言うカナメはフィーネの痴態など見ていないかのように振る舞った。

そんなカナメの心遣いはありがたかった。15にもなって恥も外聞もなく、皆の前で泣いてしまったのだ。穴があったら入りたいとはこのことだろう。もっともそのことわざはフローレンスには存在し

ていないので、大して意味はない。

「それより俺は答えを聞いていない」

「えっ？」

「俺は君の勇者になると誓った。君の強さを信じると言った。その答えは？」

どこかいやらしい笑みを浮かべてカナメは言う。こんな時までSっ気が溢れてしまっている彼はどうしようもない。いや、好きな子についちよっかいを出してしまっただのツンデレだと思えば……うん、なんでもない。

フィーネは少し唾然として、思い出す。

カナメはフィーネの勇者となると誓ったが、フィーネはまだそれに応えていない。

背筋を正し、フィーネは応える。強いと言ってくれたカナメの信頼に応えるように、毅然とした態度で。

「私はカナメを信じます。私を信じてくれたカナメを信じます。その上で聞きます」

それでも泣いてしまったのが悔しいから。

「私は私の大切なもの全てを守りたい。あなたは本当に私の大切なもの全てを、この国を守る力があるのですか？」

最後に少し意地悪を。

カナメは少しぼかんとしたような表情を浮かべ、すぐに苦笑した。

（何が力がありますか、だ。はは、俺を信じるって言っているのだから、その質問には何の意味もない。この質問は…）

ただのお願いだ。それもきわめて強力な。まるで命令のようなお願い。

この質問に答えたらカナメはもう逃げられなくなる。彼女の大切なものを守り抜くという、彼女の願いを叶えるための勇者から逃げ出すことは許されなくなる。

関係ない。もとより逃げるつもりなんてない。

一般人であった俺も、魔女であった俺も、もうすでに過去の話。

フィーネの強さを美しいと思い、彼女の勇者となることを誓った瞬間、そんな選択肢はとうに消え去っていたのだ。

答えは決まっている。

「当然だ。それがフィーネの信じる勇者、フィーネのためだけの勇者だ」

そう言つてカナメはフィーネの顔を見つめ、微笑んだ。

フィーネが赤くなつてしまった顔を誤魔化すために下を向いたのは御愛嬌だろう。

十 十 十

「さてそれじゃあそろそろ行くか」

さてこれからカナメに城内の案内をしようという時に、カナメが突然言い放った。

ここフェニキスは王都ではないものの、貿易として栄えている大都市であるために、王族の者が滞在できるよう城がある。

先の召喚を行った儀式場も、このフェニキス城内にある。

フィーネは、せっかくなのだからまずはこのフェニキス城内のどこから案内しようかと考えていたときにいきなり言いだしたカナメに、疑問の声を上げた。

「えっと、カナメ？行くってどこにです？」

「ん？どこって西にある門かな、まずは」

「なんでそんなところに行くんですか？門をくぐって城壁の外に出ても何もないと思うんですけど」

「なについて、敵を倒しに行くに決まっているじゃないか」

何を言ってるんだこの子は、みたいな可哀想な子を見るような生暖かい目で見られた。

「な、なんですか！その可哀想な子を見るような眼をやめてくださいー！つて、え？敵？」

「うむ、敵だ。絶賛こちらに向かって進行中だな。おそらくフィーネがいつていたアースガルドの軍だろう」

まるで蟻の大群だなーH A I H A I H A Iだなんていう彼のふざけた台詞なんて耳に入らない。入らないつたら入らないのだ。

「ちよつとなんでそんな重要なこと早く言ってくれなかったんですか！？」

「聞かれなかったからに決まっているじゃないか」

「子供の言い訳じゃないんですから、そんなこと言わないでください！！」

「ぶーぶー」

「ああ、もつっ！いつですか！いつ分かったんですか！？」

「ちょうどフィーネが泣き始めた頃だな」

「忘れてくださいー！なんでせめてもつと早く言ってくれなかったんですか！？」

「サプライズサプライズ」

相も変わらずH A H A H Aなんて笑うカナメが憎らしい。

ちよっぴりカナメを自分の勇者としたことを後悔し始めたフィーネだった。

「ちよっとお待ちください姫様！そんな胡散臭い男の言うことを信じないでください！アースガルド軍が侵攻してきているどうしてわかるんですか！嘘に決まっています！」

そう突っ込みをのは近衛騎士隊長アリシアである。別に空気の読めないことに定評があるわけではない。ツッコミの内容は至極当然のものであった。

「そういえばカナメ。なんで分かったんです？」

当然フィーネも気になった。

ちなみにフィーネはカナメを勇者と信じ、すでに全幅の信頼を寄せられている。フィーネの中ではもうアースガルド軍の侵攻は事実になっている。カナメが言うことは真実なのだ。

「勇者といえば千里眼くらい持っていないくてどうする」

「さすがですねカナメ！あれ、でも城内だから壁がありますよね？」

「城内にいたら無力な勇者だなんて勇者じゃないだろう。俺に不可能なんてあんまりない」

「あ、そこはあるんですね」

カナメの私の視力は53万です、とでも言いたげな言葉に素直に感心するフィーネ。

(アニメや漫画への)愛と(ハーレムを築きあげるための)勇気があれば、不可能なんてないのさ！

嘘です。

ぶつちやけこちらの世界に召喚されてから情報収集のために、多数の影分身を放っていてたまたま見つけただけです。それにしてもNARUTOの影分身ってチートだよ。ひきよーだひきよーだ。

「姫様！そんなのほんとしている場合じゃありません！もし事実なら早く軍部の者を集めて対策を！」

「アリシア、でもカナメが守ってくれるんですから平気じゃない？」

「そんな保証がどこにありますか！？その男が言っていることなんて嘘に決まっています！ですから早く会議を！」

「そうですね…。どうすればいいかしらカナメ？」

「まあさすがに戦争だし、会議はしとかなくちやまずいな。ポーズとしてとりあえず住民の避難準備だけさせておけば問題はない。あとはフィーネが王族権限でもなんでも使って俺を最前線に出撃させ、他の兵士は邪魔にならないよう後方に待機させておけばいい。一人も通すつもりはないからそれで終わる」

「そうですか、分かりました。では会議を開きましようか。ちなみ

に相手の軍の数はどれくらいですか？」

「だいたい8000くらいだな。さすがに壮観だ」

「何をのんびりとしているんですか！？その男の言う通りなら我が軍には勝ち目がないじゃないですか！一大事ですよ！？」

「何を言ってるんですアリシア。カナメがいるんですから負けるわけがないじゃないですか」

こともなげにフィーネはアリシアに反した。

フィーネの中ではすでにフローレンスの負けはない。最初からカナメが勝つと信じているからだ。

彼女はカナメの言った通り、カナメが最強の勇者であると信じている。フィーネがカナメを信じる限り、カナメはその信頼に応えてくれるだろう。

だから今一番の問題は…。

「カナメ。これから軍部を集めて会議をするのですが一緒に来てくれませんか？」

カナメの先ほどの要求を通すことだ。

そのためには軍の自己顕示欲の強い將軍たちを抑えなければならぬ。

しかしフィーネは今まで軍を率いたこともなければ、軍の会議に出

席したこともない。そのため不安を感じているのだ。

今回の戦いでフェニキスが勝利するには、カナメの出陣は必須だろう。

だが、軍部の頭の固い上役たち（バカども）が、客観的には身元不詳の自称勇者が戦って勝ってくれるだなんて信じるわけがない。

だが今回は何としてもその無茶を押し通さなければならぬ。不安を覚えるのも無理はない。彼女は今までこのような事態には無縁だったのだ。

「助けてくれませんか？」

「俺がフィーネみたいなお可愛い娘の頼みを断るわけがないだろう？」

「まあ！ありがとうございます」

と、フィーネは文字通り花が咲いたような、最上級の笑顔を浮かべた。頬にも朱が差している。その姿はとても可愛らしかった。

そしてフィーネとカナメは連れ立って会議を開くために部屋から出て行った。

一方で置いてきぼりにされていたアリシアは…。

「うう…姫様が…姫様が…！！あんなわけのわからない男の影響を…」

いじけていた。

カナメを連れて部屋を出て行った姫様の姿は、どうにも恋する乙女のように見えたのは気のせいだ。二人並んで歩くその様子が寄り添いあう恋人のように見えたのもきつと気のせいに違いない。

そうだきつと気のせいだ！

そんなアリシアの背後には、ガンンとでも言いたげに暗い縦線が何本もその存在を主張しているのもきつと気のせいさッ！

頑張れアリシアッ！目の前で君の言うわけのわからない男　カ
ナメが着々と大事なフィーネ姫にフラグを建築していようと君に
は明日があるッ！

第03話 第二王女の勇者さま（後書き）

カナメ ハイソツ 魔女で検索するとバレバレな件。

もしかしてこの小説で、作者の読書傾向や趣味バレバレじゃね？と今さらながら思った。

第04話 勇者は決して自重しない(前書き)

みんな大好き俺TUEEEEEEE、はっじまってるよー

第04話 勇者は決して自重しない

カナメは現在フェニキスの西にある城門を抜けた先にいた。

その理由とは、現在フェニキスへと侵攻中のアースガルドの軍勢を迎え討つためである。

先のカナメの要求は通り、フェニキス防衛軍への民間従軍者という立場ではなく、独自行動権を与えられた第二王女の騎士としての立場で此の場所に来ている。もっとも騎士と言うのは周囲を納得させるための一時的な立ち位置でしかなく、カナメがフィーネの勇者であるというのは変わらずである。

実はここまで来るのに軍会議で色々あったのだが、今回それは割愛しよう。

誰だって自己保身のために醜く必死な老害共の罵りあいなんて見たくないだろう。

それでも会議の様子を少し紹介すると、こうなる。

「勇者なんてそんなもの信じられるか！」

「ふざけるな！」

「姫様をたぶらかしおって！」

「8000の軍勢などどうすれば!？」

「我が軍は3000しかない!倍以上ではないか!」

「籠城して救援を待ちましょう!」

「臆病者は引っ込んでおれ!」

「我が軍が負けるはずがない!正面から迎え討てばいい!」

「手柄が欲しいだけの貴様は黙ってる」
「フィーネ可愛いよフィーネ」

こんな感じ。

実際はもつとひどく醜い罵り合いで、汚いオッサンたちの乱れ飛ぶ唾のオプシオン付きだ。

何度約束された約束された勝利の剣で吹き飛ばしてしまいたいと思つたことか。
エクスカリバー

ちなみに最後のはもちろん俺。フィーネ可愛いよフィーネ。

最終的にこの貿易都市フェニクスを捨てることもできず、また援軍も期待できないため、防衛以外の案も思い浮かばずに、アースガルド軍を迎え討つこととなった。

そこでカナメが、「ならば俺一人最前線に送つても問題あるまい。死んでもそちらの被害は無く、様子見程度には役立つだろう」と提案し、フィーネが王族権限を使ってカナメを一時的にフィーネの騎士扱いという立場を与えて強引に押し進めた結果、概ね当初の希望通りにはなった。

もつともフィーネは最後まで「カナメは正真正銘勇者です！」と主張していたが、その主張が通らなかつたためいじけていた。頬を膨らませて拗ねる美少女は、大層可愛かつたと言っておこう。フィーネ蕩れ！。

そして冒頭に戻る。

これから起きるのは本物の戦争である。その事実にかナメは気を引き締め、千里眼にて視認した敵の軍勢を睥む。

だがその場にはなぜかフィーネやミランといった面々も（近衛隊はフィーネの護衛が任務のため言わずもがな）も着いてきているが。

（しっかし、8000もの軍勢ね）

魔法が存在するようだし、実力の程は分からないが、数だけ見ると本当に多い。

うじゃうじゃといる。まるでゴキリみたいだと、嫌な想像をしてみまい、必死に頭の中から追い払う。

あー汚物は消毒だーとか言ってみてえ、とかふざけたことを思いつつも、カナメは冷静に状況を分析する。

相手の軍勢は8000に対して、こちらは3000。2倍どころか3倍に近い兵力差だ。加えて相手はアースガルドという軍事の国だ。兵士の質も向こうのが上だろう。

俺の目的はフィーネの想いを貫き通すことだ。

フェニキスの軍3000を使えばカナメの戦いも楽になるだろう。だが戦えばこちらはまず間違いない大きな痛手を負う。

またここで今回相手の軍を退けたとしても戦争が終わるわけではない。

これから先何度でも戦いは続くだろう。戦争は続く。

戦争を終わらすには、相手を滅ぼすというのが簡潔かつ一番の方法である。

だがそんな方法は御免被る。好きで人を殺したいわけでも、国を滅ぼしたいわけでもない。

想いを貫くために誰かを殺すこともやむを得なく、それゆえの殺人ならばカナメは自分の内で許容できる。

だが戦争を終わらすために大量殺人はしたくない。戦争とはいえ、超えてはいけない一線があるのだ。ましてカナメは軍人ではない。自ら進んで人を殺したいなんて思うはずもない。

ならば、どうすればいいか。

圧倒的な力を見せる。

誰もが逆らう気さえ起らないような最強の勇者の存在を見せ付ける。強すぎる力は争いを呼ぶかもしれない。だがカナメが持つのは強い程度で表現できる力ではない。

言うなれば、魔人の力。

数多の英雄、最強と呼ばれる存在たちを打ち破り、篡奪してきたカナメの力はもはや人のそれではない。

だれもが抗うことのできない神にも似た、この世の頂にある力。

その力を思い知ればアースガルドもフロレンスに対して戦争を起す気もなくなるだろう。

今後の方針は決まった。

戦いが起きればその度に俺が最前線に出向き、圧倒的な力を見せつけ、抵抗する時間さえ与えずに撃退する。

派手な技を使えば使うほど俺の存在は認知され、フロレンスは士気を挙げ、アースガルドは残酷な現実苛まれるだろう。

背には敗北も撤退もなく、あるのはただ勝利のみ。勝利以外の結果は、これから先歩んでいく道では許されない。

フィーネの想いを貫き通すその力は、彼女の大切なものを全ての災厄から守り抜く。

そんな存在になってやろうとカナメは決意した。

いつの間にかアースガルド軍勢は千里眼を使わずとも目視できる位置にまで近づいてきていた。

隣にいるフィーネもさすがに8000というアースガルドの軍勢を目の当たりにしたせいか不安を隠しきれず、後ろに控えるミランや近衛隊といった面々は目前の軍勢に顔を青くしていた。

城壁の前に待機しているフェニキスの兵士たちなど、この戦力差にすでに敗戦後であるかのような、絶望の表情を浮かべている。

さて、そろそろ出番か。

「じゃあ、フィーネ。行ってくる」

アースガルドの軍勢に向かって歩を進めようとした時、不意に手を引っ張られた。

引っ張ったのはフィーネである。

その顔には不安が先ほどよりも色濃く表れ、泣きそうな表情をしている。

「…帰ってきてくれますよね？」

フィーネは勝てるか、とは聞かなかった。

こんな状況の中でもフィーネはカナメの勝利を信じている。

それがたまらなく嬉しかった。

それでも不安なのか、何か言葉を発さずにはいられなかった。

そして出た言葉が「…帰ってきてくれますよね？」だ。

まるでカナメの居場所はフィーネであるかのような言葉。

そう言えば俺にはもう帰る場所がなかったんだと、カナメは自

嘲する。

「俺にはもう帰る場所がない。俺はもう故郷に帰ることができない」
だからこそ、フィーネの先ほどの言葉に込められた本心を知りたいと願う。

無理やり召喚してしまった責任を感じているのか、フィーネはカナメの言葉を聞き、悲痛な表情をした。

違う。責めたいわけじゃない。

「帰ってきて、だなんて…期待するぞ？」

これから先の言葉を続けるのが怖い。

「俺の居場所はフィーネで…、俺は帰ってきてもいいのか？」

返事を聞くのが怖い。

「俺の居場所になつてくれないか…？」

怖い。怖い、怖い、怖い。

拒絶されたらどうしようと、カナメはこの異世界に来て初めて不安を覚えた。

果たして彼女の返事は、

「はい！私が彼女の居場所になります！だから」

彼女の返事は満面の笑みとともに帰ってきた。見るもの全てを見惚れさせる、満面の笑顔。

まるで女神さまみたいだと思った。

「必ず帰ってきてください！」

カナメは歩を進める。アースガルドの軍勢に向けて、一歩、また一歩と。

顔が熱い。

もしかしたら自分の顔は真っ赤になっているのかもしれない。

もう迷わない。不安もない。

必ず帰ろう。

フィーネの下へと。

十 十 十

フィーネはこれから8000の軍勢を相手にしようと、歩み始めたカナメの背中を見つめる。

彼女の脳内には、先ほどのやり取りが思い出された。

カナメを信じてはいる。

だがそれでも8000という軍勢を目の当たりにした彼女は不安になり、つい訊いてしまったのだ。

「…帰ってきてくれますよね？」と。

その後のカナメの言葉は彼女の心に鋭く突き刺さった。彼女はカナメを無理に召喚し、故郷に帰れなくしてしまったことを、心の奥底でひどく悔んでいた。

だがそれも、彼の言葉に救われた。

「俺の居場所になつてくれないか…？」

カナメはフィーネを一切責めなかった。

無理やり召喚してしまったことに本当は何か思っていたのかも知れない。怒っていたのかも知れない。

それでもカナメはフィーネを責めるようなことは一切なく、居場所になつてくれと言った。

彼女は自分を恥じた。

カナメはどこまでもフィーネを信じ、フィーネの勇者でいてくれようとしていた。

信じると言ったのに、信じると言ってくれたのに、私が信じきれないでどうするっ!？

だからこそ彼女は自分が居場所になると、「必ず帰ってきてください!」と言った。

もう不安はない。

カナメは必ず自分の元へ帰ってきてくれるだろう。

例えフェニキスの兵士も近衛隊の皆が「負ける」と絶望していても、彼女だけは信じる。

どんなにぼろぼろになったとしても、カナメは決して諦めず、その手に勝利を掴んで帰ってきてくれるだろう。

今のフィーネにできるのは祈ることだけだ。

せめてカナメが無事でありますようにと。

しかし。。

彼女の心配も不安も、皆の絶望も杞憂でしかなかったと、すぐに思い知らされることになる。

奇跡は起こらないから奇跡なのではない。

奇跡は起こすものである。

ここに、フィーネ・フォン・フローレンスの勇者カナメの伝説の始まり、以後何度も彼が起こす奇跡の始まり　　最初の奇跡が起こる。

次の瞬間、圧倒的な魔力の奔流が辺り一帯に溢れかえった。

十　十　十

アースガルド軍の前に立つカナメに、その軍勢は行軍を停止した。

「その男。兵士でないのならばすぐに去れ！」

敵の將軍らしき男からの勧告され、逃げ道が提示される。

なるほど、確かに敵は軍として優れているようだとかナメは感じた。むやみに民間人を巻き込み蹂躪するのではなく、軍人としての矜持を持っている。これは確かに軍事の国と呼ぶに相応しい。少なくともアースガルドの王は暗君ではないようだ。もしくは軍を統べるものが優れているのか。

だがカナメは真っ向から応え宣言する。

逃げるわけがないと。

「俺はフローレンス王国第二王女フィーネ・フォン・フローレンスの勇者カナメ！」

8000もの軍勢の計16000からなる視線をその身に受け、一切揺らぐことなく、彼は叫ぶ。

「アースガルド軍よ、フェニクスに攻め入るといふのなら俺が迎え討つ！無駄な戦いはしたくない！命が惜しいものは去れ！」

この瞬間、カナメは命の奪い合いである戦場に、足を踏み入れた。

すでに退路は絶たれた。もとよりそんな選択肢を選択するつもりもない。

「何を馬鹿なことを！貴様もフェニクスの兵士であるといふのなら粉碎するッ！前軍進めえーッ！」

撤退の要求は拒絶された。

これから始まるのは戦争。

ファンタジーでもゲームでもない、紛れもない現実^{リアル}。

ゆえに油断も慢心もなく、最初から本気で行かせてもらおう！

「宝具『己が栄光の為でなく（フォー・サムワズ・グロウリー）』を解除」

瞬間、カナメの体から魔力が爆発した。

爆発。

正にそう呼ぶに相応しい現象だった。

カナメの体から黒い霧状の何かが抜けていく。

その正体は円卓の騎士の一人、「湖の騎士」サー・ランスロットが
宝具のひとつ。

『己が栄光の為でなく（フォー・サムワンス・グロウリー）』

この効果は本来は他者へ変身する宝具だが、カナメはステータスの
隠蔽に用いていた。

数多の強者、英雄たちから力を篡奪し、最強の存在となったカナメ
の魔力は膨大だ。あまりにも膨大すぎたのだ。

普段体から垂れ流しになる魔力のみですら、魔力を持たなかった元
の世界の人間は皆、体制がないためにカナメの膨大な魔力に当てら
れ、気絶し、動物たちは本能から恐怖を抱き、彼の住む街から一切
の姿を消す。その様子はまるでゴーストタウンのようだった。その
ため普段生活するために、魔力を抑える必要があったのだ。

つまり、それほどまでのカナメの魔力が『己が栄光の為でなく（フ
ォー・サムワンス・グロウリー）』による抑えが無くなり、一気に
溢れだした。

『己が栄光の為でなく（フォー・サムワンス・グロウリー）』とい
う枷はもうない。

比べるのもおこがましいほどの、圧倒的な魔力。

荒れ狂うカナメの魔力が戦場を支配する。

それは正に一方的な暴力といってよかった。

人の身に余る膨大な魔力に当てられ、進軍を始めたアースガルド軍は怯んだ。

さすがに魔力を持った魔法の世界の住人だけに気絶したものは極少数だったようだが、彼らが怯んだその隙を見逃してやるほどカナメは甘くない。

「『千の雷』」

カナメの手から迸るのは、超広範囲雷撃殲滅魔法『千の雷』。

「完全なる世界」ユズモエンテレイアとして「造物主」ライフメーカーらを倒し文字通り世界を救った英雄ナギ・スプリングフィールドから篡奪した魔法。

その一撃は原作のナギであっても正に反則級の威力を秘めるが、カナメの持つ魔力によってその威力は尋常ならざるほどに底上げされている。

その一撃はこの世界の魔法使いの常識すら破壊する秘儀であり、轟音と雷がアースガルドの軍勢を襲う。

あちこちから悲鳴が上がり、先行していた部隊のみならず、数多くの兵士を戦闘不能へと追い込んだ。

彼の攻撃に対し、無事だった敵の兵の何人かが魔法を放ってきた。果たしてそれは彼に見事に命中した。

敵の一部から歓声上がるも、視線の先には無傷のカナメが先ほどと何も変わらない様子で立っていた。

彼が無傷だったその種は、彼の保有するスキル『対魔力』である。

セイバーから篡奪したそのスキルは、事実上、現代の魔術師では傷ひとつつけられない。

こちらの世界で言うならば、大規模魔法か儀式魔法級の一撃でなければ、カナメには傷ひとつつけることすら叶わない。

サーヴァントに勝利すると彼らの宝具だけでなく、スキルまで篡奪出来たのは嬉しい誤算だった。

しかもスキルの装備は自由に選択・変更可能というチートっぷりである。

よってセイバーの対魔力を装備したカナメに傷を付けたければ、接近戦で武器を使うしかない。

しかしそれに気づけるわけもない敵軍は、先ほど自分が放った『千の雷』により警戒しているのか、近づいてこない。遠方から魔法でチマチマと攻撃してくるのみである。

(さて、どうするか)

敵から放たれる魔法を当然のように無効化しつつ、カナメは考える。

このまま大技を連発すれば問題なく勝てる。しかしそれでは芸がない。

(俺の目的は派手な技による圧倒的な勝利だが、8000の軍勢をまとめて討ち倒せるほどの超広範囲殲滅魔法。『千の雷』でもさすがに一撃は無理だったし)

別に大技を連発しても派手だしいいのだが、やるなら一撃で葬れるようなものであればより彼の目的に近づく。

『王の財宝』^{ゲイト・オブ・バビロン}で一気に殲滅してもいいが、自身の存在とその強さを出来るだけ喧伝することが目的の彼には、それは難しい。

もし王の耳に入り、宝具を全て王家に献上しろだなんて言われたら、たまったものじゃない。

よって『王の財宝』^{ゲイト・オブ・バビロン}は最終手段として保留。

『天地乖離す開闢の星』^{エヌマエリシュ}と『約束された勝利の剣』^{エクスカリバー}も威力は申し分ないが、効果範囲的に微妙。

(『千の雷』^{ゲイト・オブ・バビロン}を遥かに超えた超超広範囲殲滅魔法か…。いや待てよ。『王の財宝』^{ゲイト・オブ・バビロン}、宝具、魔法に限らず武器でも…、あった)

あった。確かに彼の篡奪した力の中に条件に合致するものがあった。何よりも強力で、何よりも派手で、何よりも相手を恐怖のどん底に叩き落とすほどのものが。

その攻撃範囲は四方三里（半径約12km）にも及ぶ。

カナメは虚空からそれを取り出す。

それは一本の日本刀。

刀自体は普通の刀よりも少し長い程度の、今はまだ至って普通の日本刀だ。少なくとも表面上は。

カナメはその刀の力を解放するため、その名を叫んだ。

「霜天に坐せ『氷輪丸』！」

それは護廷十三隊十番隊隊長 ひつなやまじろう 日番谷冬獅郎より篡奪した力。

ただの刀なんかでは決してない。その刀は斬魄刀と呼ばれる。死神が持ち、死神の使う刀。ゆえに斬魄刀の持つ力は普通の日本刀なんかとは一線を画す、圧倒的な力を秘めた刀である。

数ある斬魄刀の中でも、カナメが取りだしたその刀の力は化物級である

名を『氷輪丸』。

それは氷雪系最強を冠する、最強の斬魄刀の内の一振り。

カナメは『氷輪丸』の力を、その最強の力を解放した。

『氷輪丸』の解放と共に柄尻に鎖で繋がれた龍の尾のような三日月形の刃物が付き、溢れだす霊圧が触れたもの全てを凍らせる水と氷の竜を創り出す。

「天相從臨」

その力は天候を支配し、四方三里（半径約12km）に及ぶ広範囲の天候に影響を与えた。

カナメのいる戦場は少し前とは様相が一変し、氷の世界となっ
ていく。

そこはもうカナメの支配する世界。天空より全てを凍らせる氷の竜が降り立ち、敵の軍勢を襲いゆく。

その光景はアースガルド軍にとっては悪夢そのものだったろう。

天候をも支配し、氷の世界をも作り上げたカナメと敵対した不幸を嘆くことしかできない。

だが彼らにとって何よりも不幸なのは、まだ悪夢は終わらないということだ。

「ばんかい 卍解！」

卍解。それは斬魄刀解放の二段階目。

戦闘能力は一般的に5倍から10倍にまで上昇し、その強大さ故に斬魄刀戦術の最終奥義とされている。

カナメは『氷輪丸』の真の力を解放するため、その名を呼ぶ。

「『大紅蓮氷輪丸』！！！」

解放と同時に、刀を持った腕から連なる巨大な翼を持つ西洋風の氷の龍、及び三つの巨大な花のような氷の結晶となる。

そしてカナメは空へと飛びあがった。己の力をより誇示し、更なる恐怖を与えるために。

「『氷天百華葬』」

雲には穴が空き、辺り一面に雪が降りゆく。

その雪に触れた瞬間、敵の兵士たちは次々と瞬時に華のように凍りつく。

その様はまるで百輪の氷の華が咲き誇る、絶氷の世界のよう。

すでにアースガルド軍は戦意を喪失していた。ほとんどの兵士は体

のどこかしらを凍らせつつ、寒さのためか、痛みのためか、それとも恐怖のためか、顔を真っ青にして飛翔したカナメを見つめる。

その心は誰しもが同様のことを考えていた。

天候すら操る神のごとき力を持つ相手にどう勝てばいいのか、と。

そしてカナメはくしくもまるで神のように空からアースガルド軍に告げる。

「この戦い俺の勝ちだ」

すでに勝敗は決していた。アースガルド軍こそ、その事実を何よりも実感していた。

カナメは告げる。さも審判を下す神のように。

「俺はこれ以上の戦闘を望まない。敗北を認め撤退するなら追撃もしないと誓おう」

実はカナメはそれほど多くの命は奪っていない。多くは手足や武器を凍らせ、強制的に武装解除しただけに留まっている。『氷輪丸』での能力もその力を見せつけることを重視していたためだ。また前にも述べたように必要がないのに積極的に人の命を奪うだなんて考えていない。

加えて狙いもあった。

「帰ってアースガルドに伝える！フローレンス王国第二王女フィーネ・フォン・フローレンスが勇者カナメ・ハインツは、我が最強の

力を持つてお前らを討ち倒すと！」

彼の目的は、彼の最強の力を持って戦いの抑止力となること。

そのためには多くの兵に生き残ってもらい、カナメの強さを伝えてもらわなければならない。

「今回の戦闘はお前らの敗北を持って終了した。さあ、さっさと撤退してアースガルドへ帰れ！」

それを聞くと敵兵は一も二もなく、一目散に撤退を開始した。

カナメはそれを見届けると地面へと降り立ち、卍解を解除し、『氷輪丸』をしまった。氷の世界も徐々に消え去り、元の大地へと戻っていく。

戦争は　　少なくともこの戦いは終結した。一刻も絶たずに、ある一人の勇者の圧倒的な力を見せつけて。

一拍遅れて、後方のフェニクス軍から歓声が上がった。

振り返ると、フィーネが泣きそうな表情でこちらへ駆けて来るのが見えた。

（あの泣き虫姫め）

ふとそう思い、思わず苦笑してしまう。

今ここにフェニクス防衛戦は終了した。8000対3000、いや8000対1の戦いは、1の圧倒的勝利という結果を残した。80

00の軍勢は1になすすべもなく、ただ一方的に蹂躪された。対してフェニキスの損害は0。

それを為したのはカナメ、カナメ・ハインツ。フィーネのための勇者。フィーネのためだけの勇者。

フローレンス王国第二王女 フィーネ・フォン・フローレンスの勇者 カナメ・ハインツは奇跡を起こした。

第04話 勇者は決して自重しない（後書き）

卍解（キリッ）

懐かしい黒歴史です。

台詞を言ったところを（決して叫んだわけではありません。本当です。本当なんです信じてください）通りすがりの見ず知らずのおじさんに聞かれ、恥ずかしさのあまり家に帰って布団の中に頭を突っ込んで足をバタバタさせてしまいました。

第05話 美少女な姫と美幼女な娘と（前書き）

（21）

何人が分かるネタなのでしょう？

第05話 美少女な姫と美幼女な娘と

フェニキス防衛戦からはや二日、勝利の余韻に浸る一日も終わり、フェニキス城内にある演習場では開戦にともなって多くの兵士が通常よりも厳しい訓練を行っている。

周りは若い者から厳しい壮年の者までもれなく兵士である中、演習場の隅には白髪白髭の老人とすら若き

美少女という奇特な組み合わせがあった。兵士のそれとは違ういかにも魔法使いとでも言うべきローブを纏ったその二人は、明らかに兵士たちの目を引いている。

ミランとフィーネである。彼らはカナメを探して演習場に足を運んでいた。

というのもフィーネとミランは、カナメを連れて王都に向かわなければならなかったからである。その出発の時間が近づいていた。

昨日王都から、というよりフィーネの父親であるフローレンス王国現国王であるゼブロンよりフィーネに王都に帰還せよとの通信があった。

フィーネに対してゼブロンから帰還しろという通信が来るのはこれが初めてではない。

実はフィーネはある目的のため魔法の修業をする必要があり、王都から父親の制止も聞かず、半ば家出同然にフェニキスにいるミランに、弟子入りするために出てきているのだ。

王族であるフィーネが王都にいない理由はこのためであった。

だが今回の帰還命令は、その内容がいささか違っていた。

いわく「フェニクスに勝利をもたらした勇者カナメを連れて、王都へ帰還せよ」。

父親の思惑がどうにも読み取れず、フィーネは困惑していた。

先日の戦闘により本格的に戦争が始まり、王族としてこれ以上フェニクスに留まることは難しいため、王都への帰還は仕方ない。

それにしても、

「カナメを連れてですか…。お父様はいったい何を？」

問題はそこなのだ。

普通に考えれば強大な力を持つカナメを軍事利用するためであろう。

しかし此処は平和の国フローレンス。まして現国王のゼブロンは平和政策を推し進め、亜人との共存を提案するような平和の国の王に相応しい人物であった。

ならば、なぜカナメを呼び寄せるのか。

フェニクスを救った勇者を国を挙げて歓迎するためか？

フィーネを守ったことに国王として礼を言ったためか？

それともやはり戦争に参加させるためか？

カナメは現在、微妙な立場に在る。

カナメがフィーネによって召喚されたことはこのフェニクスでは周知の事実であり、8000もの軍勢を一人で退けフェニクスを守ったカナメは英雄である。

民衆にもその話はすぐに伝播し、カナメを英雄と褒め称える者が多い。兵士たちもカナメには敬意を払い、憧れを一身に受けている。

だがカナメは召喚されたことにより、こちらの世界では出身も不明で公的な所属もない。加えて後盾は王女とはいえフィーネしかない。後援にどこかの貴族が付いているというわけでもない。

つまりある程度地位のある者は、甘い汁を吸おうとカナメに取り入ろうと、カナメを取り入れようと狙っているのだ。

フェニクス防衛戦終了後の勝利の宴では、カナメに媚を売り、近づこうとする者たちの醜い争いが繰り広げられていた。その様子は醜悪の一言に尽きた。

どの者の目にも目先の利益という欲が見え隠れし、とても見ていられるものではなかった。

そんな欲望に満ちて次々とカナメの元を訪れる人たちにそつなく対応していたカナメを、フィーネは素直にすごいと思った。

王女というだけあってフィーネもよくそのような悪意ある視線にさらされるが、いつまで経っても慣れることはない。

もっともカナメは意識誘導の魔法を使い、フィーネの可愛さをただひたすら説いていただけなので、むしろ楽しんでいたのだが、フィーネの知る由もないことである。可愛いは正義なのだ！

ともかく、カナメの立場は微妙なのである。

「本当にどうしましょう…。お父様が胡散臭すぎます」

父親であるゼブロンは行動派で知られている。亜人との交流もそうであるし、なにより家族でもあるフィーネは父の行動力を知っている。その暴走を止めるのは、いつも家族であるフィーネや母親たちなのである。

「絶対に何か企んでますよ…」

「そうは言っても帰らぬわけにもいかないじゃろう」

「それもそうなんですけど…」

「悩んでもしょうがないじゃろう。それよりもカナメ殿を探さねばなるまい」

「…それもそうですね。まったくもうすぐ出発なのにカナメはどこにいるんでしょうね」

今朝カナメに与えられた部屋を覗いた時にはすでにいなかった。

それから城中を探し回るも、見つからないまま今に至る。

(まったくもう！私に何も言わずカナメはどこに行ったのですが！
?)
頬を膨らませてぷりぷりと怒るフィーネの姿はとても愛らしい。頬
を膨らませてぷりぷりと怒るフィーネの姿はとても愛らしい。

大事なことなので二回言った。

「もう！カナメはいつたいどこにいるんですか!?!」

「もしかしたら街に行っただのかもしれないのう。そこで迷ってしま
ったのなら出発の時間間近になっても姿が見えぬのも頷ける」

「カナメーッ!?!どこですかーッ!?!出てきてくださーい!?!」

「姫さま、それはないじゃろ……」

「ですよー、とがつくりとうなだれるフィーネだが、

「呼んだ?」

「きゃっ」「うおう!」

唐突にフィーネの前にカナメは現れた。それはもう何の前振りもな
く突然だったため、フィーネは思わず尻もちをつきそうになるが、
すでにカナメには散々恥ずかしいところを見られているため、これ
以上は見せられないとここはプライドにかけて耐えた。

「い、いきなり現れないでくださいよ、もう!」

「ごめん、それ無理」

そう笑顔で言い放つカナメに、フィーネは内心安堵していた。

もしかしたら何か事件に巻き込まれたのではないかと心配していたのだが、カナメの様子を見る限りその心配は杞憂だったようだ。

だが新たな疑問が生まれた。

「カナメ、さつきいきなり現れたのは何なんですか？」

「ああ、ただの瞬間移動だよ」
テレポート

瞬間、こともなげに言ったカナメの言葉にフィーネとミランは硬直した。

瞬間移動とは時空間移動魔法であり、この世界では不可能とされている。

昨日王都からあった通信も、大規模通信術式を用いた大魔法であり、使用する際膨大な魔力を消費することもあり、気軽に使うことすら叶わない。

このことから時空間移動魔法のその難しさが分かるだろう。それをカナメはこともなげにやってのけたのだ。

「はあ…。ますます規格外過ぎます」

フィーネはもう驚くのは止めようと決意した。カナメにはどうやら驚くだけ無駄のようだ。二日前の戦闘にしても、カナメの力は常識

外にも程がある。もはや想像していたおとぎ話の勇者なんて霞んでしまっていた。

「それで、カナメはいつたどこに行つてたんですか？もう出発ですよ」

「ああ、それは…。フィーネ、俺は君に謝らなければならない」

突然カナメはフィーネに向かって頭を下げた。

頭を下げられたフィーネは何のことかわからず困惑する。

「あ、頭を上げてくださいカナメ！いつたいどうしたんですか？」

「俺は自分の欲望に負けてしまった…。これは決して許されないことだ」

カナメの声に抑揚はなく、感情を押し殺し、心で泣いているようにも見える。

「許されない」それはとても悲しい言葉だった。

否応無しにそれはフィーネの心に響く。

頭を下げているため表情こそ見えないが、カナメはまるで親を見失ってしまった迷子のような雰囲気を感じる。

「許されない」その言葉に込められた意味は分からないが、一つだけフィーネにも分かることがある。

カナメは今にも押しつぶされそうなんだと。「許されない」というその重圧に。

自然とフィーネの口から言葉がこぼれる。

「許されないことなんてありませんよ」

フィーネはカナメに救われた。彼女の大切なものたちを守ってくれた。

それなら今度はフィーネがカナメを支える番だ。

支えてあげたい、カナメを。

「もしあなたが許せないというのなら、私が一緒に背負います。だから」

カナメには笑顔でいてもらいたい。

「頭を上げてください」

場にわずかな間沈黙が下りるが、

「ありがとう」

懸命に喉から絞り出したような声色で、カナメは礼を言った。

フィーネは、自分の目が熱くなっていくのを自覚する。

（こんなんだからカナメに泣き虫なんて言われてしまうんですよね）

それでもフィーネは心があたたくなるのを感じていた。

ミランも何か思うところがあるのか、優しげな目で二人を見ていた。

その場はあたたかな雰囲気に入れられ、まるで映画の感動のクライマックスのようにも見えた。

そして、

「いやー良かった！たぶんこの街のカジノ全部潰れちゃうと思うけどあとよろしく！」

「「は？」」

「今日王都に向かうから旅の準備をしろって、昨日フィーネが言ったろ？でも荷物もないし、旅の支度を整える金もないしで、昨晚からずっとカジノにいったんだよ」

「あ、あのカナメはそんなこと言ってもらえたら全部準備しましたのに。そもそもカナメはカジノに行くお金も持ってないはずでは…」

「ああ、行く途中に金貨を拾ってそれで延々と増やした」

「カナメ殿、増やしたと言ったが…一晩中とはいったいくら儲けたのじゃ…？」

「んー、ワカンネ」

「わからないとはいったい…？」

財貨が目の前に積み重ねられていくのが黄金律のスキルである。一生お金に困ることはないそのスキルに対して、カナメはギルさんに殺されまくったけど頑張って倒して良かったと、しみじみ思っていた。

馬車の搭乗者はフィーネにカナメ、お付きのメイドが4人であり、残りのミランや近衛隊の面々は王族専用の馬車の後ろから付いてくる普通の馬車（といっても王族の護衛のためのものなので一般の場所と比べるととても豪華である）にいた。

すでに勇者と認知されているカナメが王族用の馬車に同乗することに反対する者はなく、どこかから聞こえた「姫さまーっ!？」というどこかのお姫様の近衛隊長の声が聞こえた気もするが、空耳だ。

そんな近衛隊長のアリシアは、気持ち落ち込んだ様子で部下数名とともに馬車の周りを馬に乗って警戒の任にあたっていた。

さて本来、王族の移動と言うのは多くの資金と人員が必要になるものだ。

通常であれば馬車が2台のみ、また護衛が少数の近衛隊のみ、メイドもわずか4人だけなんてことはありえない。

だがメイドを友達と言ったり、家出同然に王都から飛び出すような娘であるフィーネは贅沢を好まず、あまり華美なのを避けたのだ。

さすがに馬車こそ王族専用のもではあるが。

そんな只でさえ大きく室内も広い王族専用の馬車が、世話役の人員も少ないためより広く感じる室内で、フィーネは絶賛不機嫌中であ

った。

理由は言わずもがな、カナメである。

アースガルドの軍勢を一人で討ち倒したカナメは、まさに皆のあこがれの勇者であった。

メイドたちの尊敬するようなキラキラとした視線を受け、だらしない笑顔を浮かべているカナメを見ると無性にむかむかするのだ。

でもそれ以上に不機嫌なのは、

「いったい何なんですか！？その小さいカナメにまとわりついているのは！？」

フィーネの向かいに座って、こともあろうにフィーネの目の前で見たこともない小さな妖精？といちゃいちゃするカナメの姿が原因であった。

その妖精？は約30cmほどの体躯で、桃色のふわふわな髪を持つとても可愛らしい　忌々しいことに、そうなぜかとても忌々しく思うが　姿をしていた。

「それは妖精なんですか？妖精だとしてもなんでカナメといちゃちゅいているんですか！？」

「噛んでる噛んでる」

「噛みましたー」。

「つーか落ち着けフィーネ。ちなみに妖精ではない」

「そうよ！ステラをたかが妖精なんかと一緒にしないで！」

憤慨するその姿もまるで妖精のように可愛らしいが、本人であるステラ？が言うには違うらしい。

「この子の名前はステラ。ユニゾンデバイスという、いわば…精霊みたいなものだ」

正確には電子精霊とでも言うべきなのだが、電子なんて言っても見た感じ中世ヨーロッパ程度であるこの世界では理解なんてされるわけないだろうと、カナメは簡単に説明することにした。

「ステラは俺の作った人工精霊だよ。フィーネが見たように俺の力は強大だが、身に余る力過ぎて使いこなせないものも多いんだ。それで力を使いこなすためにサポートにステラがいる」

そう、実はカナメの力は強大過ぎて、カナメ一人では力を十全に使えないものも多い。

たとえば超能力。

特に学園都市が誇るLEVEL5から篡奪した能力は、原作の登場人物たちの最高峰の頭脳による演算が能力使用には必須となる。

しかし、いくらカナメが膨大な魔力を持ち、数々の異能を手に入れたとしても、頭脳はまた別である。カナメの脳では演算を処理しきれないのだ。

そのためステラのサポートが必要となる。

ステラは管理局の悪魔のお友達のためきが使っていたようなユニゾンデバイスである。ユニゾンデバイスとは、所有者と融合を果たすことによつて驚異的な能力向上を果たす機能を有するものである。

八神はやてより夜天の力を篡奪した際、そのままインフォース？がカナメのユニゾンデバイスとなると思っていたのだが、ユニゾンデバイスは所有者にも融合に適した素養が求められ、素養も無く融合する（或いは融合に失敗する）と「融合事故」を起こし、最悪の場合周囲を巻き込んで破滅する可能性もある。

つまりカナメにはインフォース？との融合に適した素養が無かったのだ。

しかしユニゾンデバイスの補助機能が欲しかったカナメとしては諦めるわけにもいかず、カナメの持つ様々な能力を駆使し再構築することで、カナメに適したユニゾンデバイスと成った。案外何とかなるものである。もっともその際に容姿も大幅に変更してしまったが。

「そんなわけでパパはすごいんですよ！ステラを一人で作ってくれたんです！」

「パパあ！？」

「パパはパパだよ？ステラを作ってくれたんだから当たり前でしょ？パパとはずーっと一緒にいたんだからもう家族だもんねーパパ」

そう言つてステラはパパ

カナメの頭の上にこにこしながら

ちよこんと座った。

「そうだな、大切な家族だ」

「ねー、パパあ。パパはステラのこと好き？」

「ああ、大好きだぞ。ずっと一緒にいる家族だし当たり前じゃないか」

「ステラもパパのこと大好きだよ！パパ大好きー！」

「あはは。ステラったら照れるじゃないか」

「だって本当のことだもん」

そう言ってまたいちゃいちゃし始めるカナメとステラ。

フィーネの肩が怒りのためか、ぴくぴくと震えてるのは気のせいではない。

「それにいー」

さすがカナメのパートナーであるステラはカナメから影響を受けたかのように、にやにやとしたいやらしい笑みをフィーネに向けた。見事な挑発ぶりです。特大の爆弾を落とす。

「一昨日であつたばかりのどっかの誰かさんと違って、あたしはずーと、ずーととパパと一緒にだつたんだもんねー」

フィーネはステラの目の中に確かにそれを見た。

恋する乙女の情欲の炎を。

そしてステラの瞳はフィーネに言っていた。

カナメは私のもの。雌豚は引っ込んでいなさい。

ステラはキレた。それはもう見事に。

「いーから離れなさい！っ！！」

フィーネは猛然と目の前にいる雌猫ステラにつかみかかるも、ひらりと簡単に避けた。

その隙にステラはカナメの隣に座り、腕を掴んでステラに向けて「ふしゃー！」と威嚇した。

キャラ崩壊も甚だしいが、それもこれもカナメの影響だ。仕方ない。

「パパから離れなさい！この雌豚！」

「王女として命令します！カナメから離れなさい雌猫！」

もうお姫様の使う言葉遣いではないが、そばに控えているメイドさんたちはにこにことして二人？の様子を見守っているだけだ。

たぶん彼女たちもわかっているんだろう。

フィーネのその姿は、好きな人を恋敵に取られまいと必死になる恋する乙女のようにだと。

馬車は進む。騒がしく、楽しく、進んでゆく。

まだ王都への旅は始まったばかりである。

第05話 美少女な姫と美幼女な娘と（後書き）

今はまだ異世界召喚もののテンプレのようなストーリーですが、徐々にオリジナルの趣味全開の話にしていく予定です。

趣味全開は最初からですが。

第06話 フラゲは多い方が良い(前書き)

主人公がブレまくりな気がする件。

厨二病だから仕方ない。

第06話 フラグは多い方が良い

ふにふに、ふにふに。

「あの…」

いじくり、いじくり。

「カナメ…？」

なでなで、なでなで。

「何してるんですか…？」

「フィーネで癒されてる」

絶賛フィーネ抱き枕を堪能中である。

フィーネを膝の上に載せ、めいっばいふにふにいじくりなでなでしている。顔を真っ赤にして膝の上で縮こまっているフィーネといったら可愛いこと可愛いこと。

あゝ癒されるゝ、とカナメは極楽だ。

それに、

「あう…」

赤くなって照れるフィーネもいいものだ。

頭の上に乗っているステラから殺気を感じるが、今幸せなためまったく気にならない。気にならないっしたら気にならない。

「うう、なんで私はカナメの膝の上にいるんでしょうか…」

「フィーネが可愛いから」

「はう…」

フィーネの今の姿をイラストにするならば背景には『ぶしゅー』という、ツンデレヒロインが真っ赤になった時に使われる日本のO T A K U文化において伝統である効果音が必要だろう。

「いやー、だつてさー。あんな下心や打算が明け透いて見える糞みたいなオッサンやジジイどもにずっと囲まれて俺の心はとても荒んでいるんです」

「すみません…。私がすっかりしていれば…」

「気にしない気にしない。その代わりフィーネで癒させてもらうから」

「うう…。それもすごく恥ずかしいのですが…。カナメ、あの「だめ」…はい」

とまあそんな感じでカナメはフィーネといちゃらぶしていたのだが、フィーネというぽつと出の新ヒロインという存在を許さない、ギャルゲ風と言えば幼馴染、いや義理の娘という希少なポジションの古参ヒロインが一人。

「こんの雌豚がああ！パパから離れなさあーいつ！！」

ステラである。ここでステラについて語っておかなければならないことがある。

ステラは普段はツンデレである。（他人に）ツン（でカナメに）デレである。またカナメに近づく女には徹底的に敵対行動を取ってしまうほど嫉妬深い。

さてこの段階で普段からギャルゲ等に慣れ親しんでいる人ならもうお気づきであろう。彼女がある素質を持つことに。

「パパもそんな雌豚なんか早く放してステラを抱きしめてキスしてしつかりと愛して！！そんな雌豚なんかパパには必要ないから、ステラが殺してあげるから、早くステラを撫でて抱きしめてキスしよう。ねえ、パパあ。早く早くパパの愛を頂戴い。ステラもう我慢できない。なんでステラじゃないの？なんでその雌豚なの？パパはステラを愛してるんじゃないの？ステラならパパの好きにしているよ？ステラパパのこと大好きだもん。パパのこと世界で一番愛してるもん。だからパパの好きにしているよ？パパあ、早く縛ってぶつてよあ。お願いだからパパあ。じゃないとステラその雌豚殺しちゃうかも。だってパパが愛してるのはステラだけだもんね。そんな雌豚なんて愛してないよね、いらぬよね？じゃあ殺していいよね？パパにはステラだけいいよね。：ねえパパ。どうして何も言ってくれないの？なんでステラを無視するの？ねえ何で？何で何で何で何で何で？！！？ああ…ステラ無視されちゃってる…パパに無視されちゃってるよう…。もうだめ…パパあステラにもいじわるしないで…。ああでもステラはパパにならぬいじわるせれてもいいよ。ううん、もつといじわるして…もつともつとステラをいじめてえ…。パパあ…放置プレイなんてステラもうだめえ…感じちゃうよあ…」

「自重しろ変態」

わかりやすいキャラ紹介乙。

桃髪ちび精霊ステラはツンデレ義理の娘ポジションじゃありませんでしたとわ。

我が家の娘は、変態ヤンデレドM精霊でした。まる。

十 十 十

現在フィーネ一行は、川の近くの見晴らしのよい拓けた場所で野営中だ。

フィーネという王族がいる以上夜間に魔物が出るリスクを冒してまで道を進めるわけにはいかず、きりのいいところで馬車を止めたのである。

ん？時間が跳んだ？ヤンデレはどうしたって？

世の中には秘儀・章変えリセットという奥義が存在するのです。あ

とは察しろ。

いや、意地悪はマゾのステラだけにしておこう。

あのヤンデレ状態のステラにカナメは耳元で一言言ったのだ。

「正妻が妾ごときを気にしてどうする」と。

人はそれを悪魔の囁きともいう。正妻と言われ別の意味でまたトリップしたステラを放置すればあとは平和の完成である。お手軽3分クッキングも真っ青の手際である。

ちなみに今はメイドさんが川のほとりで食事を準備中、近衛隊は付近を警戒中、フィーネはメイドさんたちを手伝おうとして拒否されていじけている。

メイドたちに手伝いを断られてしまった以上手持ち無沙汰になってしまったフィーネは、同じく手持無沙汰なミラン（国内1、2を争う大魔法使いであるミランに手伝わせるわけにはいかないと、こちらもフィーネと同じく遠慮された）とで何か役に立とうと川で釣りをしている。

野営の準備中とはいえまだ夜の帳が下りているわけではなく、落日の最中である今は辺りは赤く照らされ、釣りへの支障はない。

もっとも釣りをする王女という存在に支障があるかないかと問われれば、それは閉口するしかない。

「カナメ殿が来てから慌ただしかったから、こういうのんびりとした時間もいいのう」

「ふふ、そうですね。でもカナメがいてくれなければこうしてのんびりすることもできませんでしたよ」

そう言っつてフィーネは微笑んだ。

ミランもカナメに感謝の念をいだいており、フェニクスを守ってくれたことに感謝を述べたのだが、カナメは「あんなの俺がやりたくてやっただけだ。礼が言いたいならフィーネに言っつてくれ。フィーネの守りたいっつて想いがなければ俺は何もしなかつただろうさ」といっつて感謝の言葉を受け取っつてはくれなかつた。

たぶんあのひねくれ者の少年はどれだけ感謝の言葉を受けようとも、暖簾に腕押し、柳に風のように決して素直に受け取っつてはくれなかつたろうとミランは思っつう。カナメの飄々とした姿を思い浮かべたミランの顔から思わず笑みがこぼれた。

フィーネとミラン、木の枝を利用して作つた素人製の釣竿を持つたまま、二人揃っつて笑みを浮かべてこの穏やかな時間を堪能してつた。川のせせらぎと、メイドたちの調理の音をBGMに、のどかに釣りは続っく。

しかし、平穩とは唐突に破られるものである。

後から考えれば、川の近くで野営を決めた時点でそのフラグは立っつてつたのだらう。

フラグとは唐突に発生するものである。

こんな魔法の世界で平穩なんて描写は、フラグに決まっている。

ゆえに、

「「緑色だー！！！！！」」

穏やかな空気なんていうあからさまに何かありますよ的なフラグはすぐに回収され、辺りにはフィーネとミランの悲鳴が響き渡った。

警戒中だったアリシア達近衛隊は悲鳴を聞きフィーネ達の下へ即座に駆け付け、メイドたちもまた少し遅れてやって来た。

「姫さま！一体どうなさいましたか!?!」

駆けつけたアリシア達が見たものは川のある一点を凝視し、見てはいけないものを見てしまったという表情を全力で表現しているフィーネとミランであった。

「あ、あれを…」

なんとか言葉を口から絞り出し、フィーネは川の方を指さす。アリシア達もフィーネの指さす方に目を向け、

「緑色だー！！！！！」

アリシアもフィーネたちと全く同じ台詞を叫んだ。

フィーネたち全員の視線の先には全身が緑色の人型、頭の上には皿があり、背には甲羅を背負った見たこともない生物がいた。

はつきり言おう。河童がいた。

「え、ちょ、姫さまなんですかこいつ!？」

「アリシア、私に聞かないでください!分かりませんよっ!」

「この緑色のは魔物なのかのう」

だが残念ながらアーク大陸には河童の伝承は存在しないようで、河童という存在の希少性を理解できるものはこの場にはいなかった。

「えっと、緑色の魔物さん?でよろしいのでしょうか?」

フィーネが先ほどから攻撃してくる様子のない緑色を見て意思の疎通を図ろうとする。ミランたちは見た目から亜人ではなく魔物だろうと推測し、意思の疎通は無理だと考えていたが、

「おい。テメ今なんつった?」

緑色は見事に期待を裏切り、喋った。

「肌の色で人を差別してんじゃねーよ」

しかも差別問題に言及してきた。

なんだこの緑は。フィーネ一行の心は一つになった。もう一度繰り返そう。なんだこの緑は。

「えっと、お主は魔物ではないのか？」

混乱している一行の中で、いち早く混乱から回復した最年長のミランが緑に問いかける。

「ちよつと待て。なんだその差別発言。なにお前は人を見たら差別しろと教育を受けた残念な人なの？」

「いや、そういうわけでは…。全身緑色でその格好ではできり魔物かと」

「ちげーよ。言い訳はいいんだよ。ひとを傷つけてしまったら言わなくちゃいけない言葉があるんじゃない？それとも人を差別している謝罪の言葉一つないの？馬鹿なの？死ぬの？」

「その、すまんかった」

絶好調の緑に押され、ミランはつい謝罪の言葉を述べた。だが心の中では相変わらず、なんだこの緑は、である。

そんな心情を知らない目の前にいる緑はにこやかな笑顔を浮かべてミランに向けて手を差し出してきた。どうやら何かを渡そうとしているようで、反射的に手を差し出した。

「よし、お兄さんは素直に謝れる良い子は大好きだぞー。きちんと謝れたご褒美にいいものをあげよう」

べちゃっ。

緑の手からミランの手の上に何かが落とされ、嫌な音がした。

「ビスケットだ。あとでおやつに食べなさい」

ミランは自分の手を見ると、確かにビスケットがある。川の水でびちょびちょになって崩れまくったビスケットが。

「なんだこの緑は」

つい本音を漏らしてしまったミランをだれが責められようか、いやせめられない。反語。

そしてようやくフィーネたちも混乱から回復してきたようで、会話に加わってきた。

「それで、あの、結局あなたはどちら様なのでしょうか？」

「河童だ」

「河童…ですか？」

「ああ、伝説の妖怪だ。妖怪って言うのはまあ、神に近い存在だ」

「は、はじめて見ました…」

「だろうな。数が少ないからこそ伝説の存在だ」

はあ…、とフィーネたち一同は釈然としないままだが、一応の納得をみせた。

「でさあ、ちょっと頼みがあるんだが、いいか？」

「？はい」

「もし俺の仲間を見たときはあんまり驚かないでやってくれないか？」

そう言った河童の表情は、悲しみや寂しさなどごちゃ混ぜにあって、フィーネは思わず感情移入して泣きそうになってしまった。

そっだ。

たとえどんな姿形をしていようと、誰かから拒絶されるのは寂しいことだ。

フィーネは見た目で偏見を持ってしまった自分を恥じた。

だが、河童の彼には言わなければならぬことがある。

「肌色見えてますよ、カナメ」

「え、マジ？」

「はい、今直してあげますからこっち来てください」

「助かる。ありがとな、フィーネ」

呆然とその会話を聞いていたミランやアリシアたち一同は我にはつと我に返った。

「えっと、カナメ様なのでしょうか？」

今まで会話に加わっていないなかったメイドの一人が恐る恐るフィーネにカナメと呼ばれた河童に話しかけた。

「いえす、でござるよ。あ、フィーネ。ちょっと川から上がるから手引っ張ってくれ」

「はあ。しょうがないですね。はい、捕まってください」

メイドの問いにあっさりと答えたカナメは、フィーネの手を借りて川から上がった。

「あ、やべ。スーツの中に水溜まっちゃってるわ」

依然としてマイペースのままのカナメは靴を脱ぎ、中に溜まった水を流している。

周囲の皆は啞然としてしたが、まあカナメだし、と苦笑している。本人にとっては不本意かもしれないが、ここにおふざけキャラという属性がカナメには追加された。

もしこの世界に屈強な戦士びっぴーがいるか、プレミアムな登録をやたらと推してくるニコニコな動画が見れるいんたーねつつがあれば、彼の属性は厨二病の一言で済んでいたことだろう。

張り付いて脱げねえ、とかぼやいているカナメを見るミランなどは

「皆の緊張を解すためにあえて笑われ役になるとは、なんとという少年じゃ」と感心しているが、勇者補正ばねえとしか言いようがない。だがどこにでもKYな人間はいるものである。

ツッコミ役として定着しつつある、アリシア・ソレイシイその人である。

「貴様ふざけるのも大概にしろ！何をやっているんだ貴様は!？」

KY。

空気読めない、の略ではない。空気を読まないの略である。

自身の誇りにかけてこんなふざけたヤツを認めないとする意地っ張りなアリシアは、あえて空気を読まないという性質の悪い属性を有している。

さすがアリシア！おれたちにできない事を平然とやってのけるッそこにシビれる！あこがれるウ！

だがカナメはそんなことでめげる男ではない！厨二病患者の名は伊達ではない。

「無限大な夢の後の何もない世の中じゃそうさ愛しい想いも負けそうになるけど俺は決してフラグを見逃すわけにはいかない!!」

「意味が分らぬわ!!」

エンジン　　ーーン！！と叫ぶカナメはそのテンションのまま続ける。

「だって現実で荒川でアンダーなブリッジで村長やったら捕まるじゃないか！そんな時にこんな大自然の中で川を見つけたらもうフラグとしか思えないだろ！！」

「貴様は何を言っているんだ！？」

「つまり世の中はフラグで満ち溢れているのだよアリシア君。河童フラグしかり、盗賊襲撃フラグしかり」

「だから意味が、盗賊だと？」

「ああ、遠くからこちらの様子を伺いつつ、襲撃の機会を図っているな。で、どうするよフィーネ」

「だからなんでカナメはそういう大事なことをそんなささりというんですか！？」

そこはかとなくツッコミ所が違う気がするが、フィーネの場合はこれで合っているのだ。

もうフィーネは何でそんなことが分かるのかなんて聞かない。聞くだけ無駄だから。

それはこの場の皆の共通見解であり、だれもツッコもうとしない。フィーネ一行はカナメのおかげでひとつ賢くなりました。世の中には聞いても無駄なこともある。

しかもいつの間にか緑の河童スーツを脱いでいて、私服のカナメに戻っている。川の中にいたはずなのに、今は全く体が濡れてない不思議。魔法で案外なんとかなるものなのだ。魔法万能説。

「さてと、おいでステラ」

「はいパパ」

今まで姿を見せなかったステラが、カナメに呼ばれて姿を現した。

「じゃあ、パパを傷つけようとする虫けらを早く殺しにいこっ」

「殺しはダメだぞ、ステラ。九分九厘殺しまでな」

あまりにも気軽な口調で行われる会話の内容に、フィーネたちは思わず閉口してしまう。

だが続くカナメの言葉にフィーネは驚き、笑みを浮かべてしまうことになる。

「人攫いなんてふざけたことする連中、簡単に殺してやるものか」

救うこと。守ること。それがフィーネがカナメという勇者に願ったことだ。

どんなにふざけていても、どんなに軽そうにしても、カナメは

フィーネの勇者であった。どこまでも愚直に、まっすぐに、勇者であるうとしている。

そのことが分かったからこそ、フィーネは思わず笑みを浮かべてしまった。

きつとカナメに助けられる人は多いだろう。いやこれは確信であった。

フィーネが望む限り、カナメは彼自身が持つすべての力を奮い、助けを望む全ての人を余すことなく救って見せるだろう。

なんていったって、カナメはフィーネの勇者さまなのだから。

でもフィーネは一言注意するのを忘れない。

「カナメ、やりすぎないでくださいね」

「りょーかい」

相も変わらず軽い調子でカナメは応えるが、その顔にはフィーネ同様笑みが浮かんでいた。

そしてカナメはもうすぐにも夜の帳が下りようとしている中、ある方向を向く。ステラもカナメについてそちらの方向を確認しており、おそらくはカナメのたちの見るその先にカナメの言った盗賊がいるのだろう。フィーネたちから全く確認できないが、カナメが言うからには必ずいるのだろう。

まったくなんていう勇者さまなのだろうか、フィーネはそう思う。

あまりにも強く、あまりにもかっこよく、あまりにも優しい。どこかひねくれ者の彼は、フィーネにはまぶしすぎるように見えた。

「じゃ、言ってくる。ステラお願い」

「うん！早くやっちゃおう！」

「ユニゾンイン」

カナメとステラは一つに重なり、彼らは光に包まれた。

姿と意思を持ったユニゾンデバイスであるステラはマスターであるカナメと融合を果たす。

これはカナメが本気で怒っている証である。彼は以前世界から拒絶され、世界から理不尽を行使された。それゆえに理不尽にも誘拐などというふざけた行いをする彼らを許すことなどできるはずもなく、断罪しようと決めていた。

野営の準備のため馬車から下りた時に、風を用いて周囲の策敵をしたときにカナメは盗賊の存在にすでに気付いていた。同時に彼らに囚われている“彼女”の存在にも気付いた。

その時にはすでに決めていた。盗賊なんていうちっぽけな奴らでも本気で断罪してやると、そのために「神が住む天界の片鱗を振るう

者」に相応しい超能力を行使すると。

光が収まったその場には、ステラと融合を果たしたカナメがいた。

その姿はユニゾンの影響により髪が伸び、腰にまで届くその長髪は美しい金色をしていた。カナメの端正な顔もあり、美しい金の髪を携えたその姿は幻想的で、まるで絵画のようだった。

「では行こうか。美少女救出フラグを回収しに」

ふざけた口調とは裏腹に、その瞳には怒りを炎を灯して。

「俺の『ダークマター未元物質』に常識は通用しねえ」

たとえこの偽りの世界であっても、な。

第06話 フラグは多い方が良い（後書き）

まず感想を頂きましたharu様、本の虫様に最大限の感謝を。執筆の励みになり、大変助かりました。本当にありがとうございます。物語についてですが、そろそろ王道テンプレを脱して物語の核心にも触れていこうかと思えます。

まだまだ完結まで先は長いですが、お付き合いいただければと思います。

最後に読者の皆様に息災と、友愛と、再会を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5347q/>

魔女はかくして勇者となる

2011年3月3日07時16分発行